



いわて教育総研ブックレット  
教室の窓から  
～生徒たちが教えてくれたこと～



いわて教育総研ブックレット

## 教室の窓から

～生徒たちが教えてくれたこと～

岩手県教職員組合・岩手教育総合研究所  
佐藤 淳一

岩手県教職員組合・岩手教育総合研究所  
佐藤 淳一

|                                  |    |
|----------------------------------|----|
| (1) 校内暴力の嵐の中で                    | 1  |
| (2) 折染とザリガニ                      | 2  |
| (3) 片道72kmの冒険!?                  | 3  |
| (4) Yをクラスの仲間に(その1)               | 4  |
| (5) Yをクラスの仲間に(その2)               | 6  |
| (6) Sを私の班に                       | 7  |
| (7) 真冬の雪合戦                       | 9  |
| (8) 頭髪規制の解除を生徒たちが主体的に実現するために(前編) | 11 |
| (9) 頭髪規制の解除を生徒たちが主体的に実現するために(後編) | 13 |
| (10) Uの決意の受け止め方                  | 16 |
| (11) 金髪の意外な理由                    | 17 |
| (12) S教頭の涙                       | 19 |
| (13) ビリからの脱出                     | 20 |
| (14) 笑顔を忘れてしまった君に届ける歌声           | 23 |
| (15) 信頼の扉                        | 25 |
| (16) “ランド”か“シー”か?                | 27 |
| (17) 1人の進路選択を救った法制度              | 29 |
| (18) 「先生、今度『犬の歌』を作ってください」        | 32 |
| (19) 18歳選挙権がやってくる                | 33 |

## (1) 校内暴力の嵐の中で

1981年3月に大学を卒業はしたものの、教員採用試験に不合格になり、アルバイトをしながら試験勉強をしようと思っていた矢先に常勤講師の話があり、沿岸のS中学校に勤めることになった。当時のS中は、学年3クラスの規模で、20人ほどの教職員のうち私を含めて3人が臨時講師だった。

当時の校舎は、山田線S駅奥の山際にあった。しかし、のんびりとした学校の周辺環境とは全く違い、対教師暴力を含む校内暴力を始めとした「問題行動」の状況は想像を絶する凄まじさで、校舎破壊、授業の抜け出し、恐喝、窃盗、万引き、喫煙、飲酒、シンナーなどの「事件」の対応に追われる毎日だった。教育実習以外の学校現場経験がまったくなかった私は、どうしたらよいかかわからず、なんとか生徒たちに授業に前向きに参加してもらえないかと悪戦苦闘していた。しかし、そんなに上手くいくはずもなく、授業が成り立たない状況に途方に暮れる日々を過ごしていた。

今であれば、メンタルを害してもおかしくない状況だったと思うのだが、たいして精神的にタフでもない私がそうならなかったのはなぜだったのだろうか。今思うと、当時は「問題行動」の状況分析や対策など、職員間で頻繁に認識を共有し、組織的な対応となるよう努めていた。そのことによって、大変な状況ではあっても、職員一人ひとりが孤立することから守られたのではないかと思う。

またS中には、県北経験のため単身赴任の下宿生活をしていた50歳代の先生が何人かいて、どうしたら生徒たちが落ち着き、正義感を取り戻し、前向きなエネルギーを勉強や学校行事に集中してくれるようになるのか・・・など、何度も何度も話し合ったものだった。このことにも私は強く励まされた。

当時の中学校は全国的に荒れた状況で、S中だけが荒れていたのではなかった。では、なぜ、全国の中学校が荒れた状態になってしまったのか。その少し前に、「受験競争の激化」の中で、学習指導要領の改訂によって授業時間数が大幅に増えるということがあった。これによって、「勉強の苦手な生徒たち」が「学校の中に自分たちの居場所を見いだせなくなった」のではないか。だから、彼らは「外」ではなく「学校の中」で荒れたのだと思う。

おそらく、学校の活動全体を通して生徒たち一人ひとりが大事にされていなかった状況に対しての、彼らの意思表示・表現としての抵抗ではなかったか。ある先輩は、「彼らの行動を表面だけで見るな」と教えてくれた。

教員としての経験も技能もない私は、自分の無力さを痛感し、大学を卒業する頃に抱いていた夢や理想は1年過ぎる頃には粉々に打ち砕かれていた。そして、「教員として仕事を続けるのは無理だ。どうせ講師だからもう教員をめざすことはやめよう」とも思うようになっていた。

そんな考えを改めさせてくれた言葉が二つあった。ある先輩が教えてくれた「教育に臨時はない」という言葉と、ある生徒が自分の担当する学級新聞最終号で私に向けて書いてくれた「先生にはたくさん迷惑をかけたかもしれないけれど、こんなことぐらいで教員をめざすことを諦めないでください」という言葉だった。

私は、自分が恥ずかしくなった。「講師だから」などと甘えていたが、生徒たちにとっては、正規も臨時もないのだ。教員として全力で生徒たちと向き合うこと、現状の困難から逃げずに真摯にそれを乗り越える努力を続けること、その大事さに気づかされた。そして、「こんなことぐらいで教員になることをやめないで」と思ってくれる生徒が一人でもいたことに、「学校の仕事も捨てたもんじゃない」と勇気もらったのだった。

## (2) 折染とザリガニ

1984年の秋、講師生活4年目を迎えていた頃、「盛岡近郊S町のA小学校で病休の先生がいるので行ってほしい」との話があった。小学校の免許は持っていない旨を教育事務所に伝えたと、「臨時免許を発行するのでそれで可能だ」とのこと。「自分に務まるのだろうか」という不安を抱えながらも、引き受けることにした。

A小学校は町東部の山間にあり、学年1クラスの小規模な学校で、素朴な6年生27人と一緒に数か月を過ごすことになった。授業の担当は音楽以外全部で、中学の社会科しか担当したことのない私は、初めての授業に苦戦することになった。そこで、「上手くやれるはずもないし、どうせ数か月だ」と開き直り、子どもたちと一緒に楽しめる教材を探すことにした。

1ヶ月ほど経った頃、学習発表会の準備が始まり、展示は毛筆習字と絵などを飾り、舞台発表で劇をやることになった。

毛筆は、私自身子どもの頃に多少習ったことがあったのだが、教えるとなると話は別だ。短期間に全員が上達できる指導法があればいいのだが、それは無理な話である。そこで、ある教育雑誌に出ていた、「折(おり)染(ぞめ)」(紙を屏風折にして折った四隅の角を染料に付けて開くと、色とりどりの花柄のような模様がついた世界に1枚だけのデザインの本紙ができる)の技法を半紙に応用して、できた半紙のイメージから浮かんだ文字を書くことにした。

つまり、普通の授業でやる書写とは、「半紙それ自体が一人ひとりのオリジナル作品である」とこと、「全員が同じ文字を書くのではなくそれぞれが半紙のイメージに合った好きな文字を選んで書く」という2つの点で異なっていた。教室の壁に飾られた展示作品は、いわゆる「字の上手い下手」だけで比較されることはなく、世界に1枚しかない作品として飾られることになった。子どもたちが、作品制作に集中して一生懸命頑張ったことは言うまでもない。

図工の時間の絵の指導も、素人の私には大きな不安だった。そこで、これもある実践報告を参考に組み立ててみた。まず、近くの沢に行きザリガニを何匹か捕まえ、そのザリガニをモデルに絵を描くことにした。

ここでも一般の指導と大きく違うことがあったが、それは、同じ大きさの画用紙でスタートしても、出来上がりの画面サイズは一人ひとり全く違うものになるということだった。つまり、ザリガニ1匹を1枚の画用紙に収まるように描くのではなく、ザリガニのどこから描き始めてもいいし、途中で線が画用紙の端までできてしまったら、次の画用

紙を繋いで張り合わせて描いていいということにしたのだ。

その結果、出来上がった作品のザリガニは、大きさも形も実にバラエティーに富んだ魅力的なものになったのだった。

教科書の手本を基準に、それに似ている文字の形や絵の対象の形だけを上手いと評価することが果たして妥当なのか、素人の私にはわからない。しかし、「子どもたちの感性を大事にしながらい型にはまらない表現力を伸ばす」ことも大事だと思うし、それは他と固定的な見方で比較しないことで生かされることがあるのではないかとも思える。

今の学校で、点数や順位の優劣を基準に価値観が画一化され、本来子どもたちが持っている多様な力が窮屈に閉じ込められてしまっていないか。そしてもしかしたら、それによって多くの子どもたちにとって学校が楽しく学べる場所になっていないという状況が作られてはいないか。当時のことを時々思い出しながら、私は少し心配になるのである。



### (3) 片道 72kmの冒険！？

5校での講師経験をしたのち、1985年4月に新採用としてM市のO中学校に赴任した。最初に担任したのは2年生だったが、初めての担任で、1年は無我夢中で過ぎていった。そして2年目は、持ち上がりの3年生担任となった。この時、私のクラスの副担任を受け持ってくれたのがS先生だった。

そのS先生から1学期の中盤ごろ、「クラスにまとまりがないから夏休みにレク（レクリエーション）を企画しろ」と言われた。学級レクの企画の経験がなかった私が、「どんなレクがいいですか？」と聞くと、「そうだなあ、1日かかって自転車で行ける一番遠いところまで行ってキャンプをしてみろ」とのこと。「例えばどこがいいですか？」と重ねて聞くと、「湯田あたりはどうだ」との答え。さらに、「3年生の夏休みって受験勉強に響くとか反対も出るんじゃないですか？」と聞くと、「自由参加で希望者だけでいいからまずやってみろ」との答え。私は不安なまま、「先生もついて行ってくれますよね？」と確かめると、「俺は車で行くから担任は生徒たちと一緒に自転車で行くこと」とのことだった。

こうして、夏休み中の8月1日、30℃を超える暑い日に学級レクが決行された。当時、雫石から沢内に抜ける「山伏トンネル」は開通しておらず、途中つづら折りの山伏峠を登る、M市～雫石～沢内～湯田までの片道約72kmを自転車移動する1泊キャンプが行われた。参加者は45人中30人前後だったのだろうか。ちなみに、私の自転車はいわゆる「マ

マチャリ」で、生徒たちの中には、10段変速の自転車の生徒もいて、私が片道6時間かかったのに対して、3時間ほどで着いた生徒もいたようだった。

今であれば、校長からも教育委員会からも許可が下りそうにない企画だが、実施できたのは、多くの支えがあったからだ。S先生の力添えはもちろんだが、保護者の協力にも大いに助けられた。採用2年目の私を頼りなく思ったのか、学級PTAによる準備会を何回か開いて、「私たちもついて行って調理の手伝いをしてあげるから」とか「パンクした自転車があったら、軽トラに積んで行くから心配しないでいいよ」などと本当に温かく見守ってくれたし、批判的な意見はほとんどなかった。

私も、迷惑はかけられないと思い、下見を2回行った。1回は家族と一緒に車で行ってみて、経路の略地図を手書きで作った。2回目は、班長会メンバーの何人かを（これも今は認められないと思うが）車に乗せて、道順を教えながら確認してきた。こうして、無事にキャンプは行われたのだった。

では何故、S先生は一見無謀とも思える行事を提案したのだろうか。当時は、その理由がわからなかったが、今は何となくわかるような気がする。それは、たぶん「クラスがまとまらない状況の中では、協力しようと呼びかけても生徒たちが自ら行動することはなかなかできない。だから、自転車で長い距離を移動して疲れ切った状況の中で、テント設営や、薪拾いや、火おこしや、夕食の調理など、協力なしには何もできないということを経験させよう」ということだったのだと思う。

2学期が始まり、間もなく文化祭に向けての取り組みが始まったが、1学期とは違い、生徒たちどうしが自然に協力をし合う場面が、あちらこちらで見られるようになっていた。私は、説得力のない協力の呼びかけだけでは得られない、「同じ釜の飯を食う」という状況の中で得られる関係性や信頼性の意味を、この学級レクを通して学んだのだった。

### (4) Yをクラスの仲間に（その1）

「先生、Yが教室から外に抜け出しました！」ある日、1時間め終了後の休憩時間に班長の1人が職員室に駆け込んできた。

「外って？」

「昇降口から出て、裏の田んぼのあぜ道を走って逃げています。今、班長の何人かが走って行って追いかけています」

「そうか、じゃあ急いで行ってみよう」

Yは1年生の時には私が担任していないクラスの生徒だったが、その時からまわりにしばしば暴乱な行動をすることが学年で話題になっていた。それに、時々授業から抜け出すこともあり、クラスの生徒たちは彼にどう接してよいか困ることが多かったのだった。

初任校のO中学校4年目の1988年度、私は2年生の担任となり、生徒たちと共同で学級をつくる取り組みをいろいろと試してみたいと思っていた。その一つが、当時「生活指導（民主的集団づくり）」の学習会で学んだ「班指導・リーダー指導・討議指導」

の実践だった。若かった私は、何とか「このクラスと一緒に過ごせて良かった」と全員が思えるようなクラスができたかと思ひ、生徒たちとともに試行錯誤をすることになった。そして、そのためにリーダー指導の一つの方法として、「班長会」を大事にしていくことに取り組んでいた。

昇降口から外に出てみると、ちょうど班長会のメンバーに付き添われてYが戻ってくるのが見えた。普段ちょっと乱暴なところもあり、注意すると反抗的な態度をとるところもある彼が、なんだか妙に神妙に見えた。まわりの班長たちは、「次の数学はちょっと苦手かもしれないけど、わからないところは教えるから一緒に頑張ろうよ」「それに、3・4時間めはYの得意な調理実習もあるからさ」などと話しかけている。

私はちょっと意外だったので、呼びに来てくれた班長に尋ねた。「Yって家庭科好きだっけ？」

「先生、Yは両親が仕事で帰りが遅くて、お姉ちゃんと二人で夕食を作って食べていることが多いらしいよ」

「へえ～そうなんだ。知らなかった」と別な班の班長が。

私は、Yを自発的に追いかけた班長会の行動を嬉しく思うとともに、もしかしたら、Yも先生に追われるよりクラスの仲間に捕まえてほしかったのかもしれないと思った。仲間意識の薄いクラスであれば、まわりに迷惑をかける生徒が抜け出しても、知らない振りをするかもしれない。でも、班長会は自ら追いかけてようとし、Yもそれを受け入れた。私は、班長会で日々話し合ってきたことが、班長たちを孤立から救い、1人では対応が大変な事も協力して乗り越えようという意識を育て、そして、クラスのみんなが仲間として関係性を築き始めていることに、勇気ももらったのだった。

その日の調理実習は、おらずに魚のフライをつくるというものだったが、「魚を三枚に上手におろす」ことができたのは、クラスの45人の中でYだけだった。生徒たちは、Yのまわりに集まって、「すごいね」とか「上手いね」とか口々に言っている。Yも照れた笑顔で、まんざらでもないようだ。

私は、それを見ながら、「『昔』のクラスでは、勉強や運動以外にも遊びの名人とか、昆虫博士とか、鉄道マニアとか、漫画評論家とか、子どもたちのいろんな『得意』が認められ、一目置かれていたけれど、今の学校は果たしてそれぞれの子どもたちが持っている『得意』を認め合える状態になっているのだろうか」と考えさせられたのだった。



## (5) Yをクラスの仲間に (その2)

文化祭が近づいたある日の班長会で、「Yが最近また、まわりの人を殴ったり蹴ったりするので困っています」という話が出された。

「先生、このままだとYの面倒を見切れません」とYの班の班長が困った顔で言った。

他の班長たちは、どうしたらよいかわからず黙っている。私もどうしたらよいかはつきり見通しを持っていたわけではなかったが、班長たちに聞いてみた。

「Yが乱暴なことをするのは、何か理由があるんじゃないかなあ。誰か、彼に理由を聞いてみたことはないの？」

「……」

「じゃあ、どんな時に乱暴な行動をとるか、思い当たることはないかな？」

ある班の班長が言った。「そういえば、まわりがYに注意した時とかに乱暴になることが多いかも……」

「そうか、Yは注意されたときに何か言いたいことがあっても、自分の気持ちを上手く言えず、それが乱暴な行動につながっているのかも。もしかしたら、みんなに関わってほしいと思ってもその方法がわからないのかもしれないね」

「でも先生、このままじゃ困ります。文化祭の取り組みが始まっているのに、Yはさっぱり協力しないし、遊んでばかりいるから。これなら班やクラスにもいない方がましです」

私は、文化祭の展示や合唱などの取り組みを通して、Yとまわりの関係をつくることができなかと考えていた。そこで、ここが重要な分かれ道になると思い、次のように話した。

「確かに今の状態ではYはクラスみんなに迷惑をかけているし、取り組みに支障がでていると思う。でも、ちょっと考えてほしいんだけど、仮にYがいない状態で文化祭の展示や合唱がうまくいったとしても、それは本当にクラスとしてみんなが納得できる成果だと喜べるものなのかな？卒業の時に全員が『このクラスで良かった』と思えるためには、多少の苦労があっても、それを乗り越えることが必要だと思うよ。みんなは本当にYがクラスにいないほうがいいと思うのか？もしそんなふうに考えるのなら、Yでなく、他の誰かが迷惑をかけても、同じように考えてしまうんじゃないかな？Yは、本当はみんなと一緒に取り組みたいけど、それが素直に表せないだけなのかもしれないよ」

少しの沈黙の後で、Yの班の班長が言った。

「わかりました。何とか班の人たちと協力して、Yと一緒に取り組むように頑張ってみます。ただ、暴力に対してはどうしたらいいですか？」

私は、一つ提案をした。「では、こうしたらどうかと思うんだけど、Yに注意したいことがある時は、いきなりその行為を『やめて』と言うのではなく、『どうしてそういうことをするのか？』と理由を聞いてみよう。そして、落ち着いて話ができるようなら、『それはまわりが困るからやめよう』とか、『そういう時はこうしたほうがいいよ』と『○しようよ』という呼びかけにしてみよう」と。

班長たちから徐々にYへの対応がクラスに広がり、根気強く続けられ、少しずつYの暴力はおさまっていった。それは、Yを疎外せずに仲間として受け入れるというメツ

セージがYに伝わっていったということでもあった。そして彼らは、クラス展示で教室の壁面いっぱいに見事な『ゲルニカ』の模写を完成させたのだった。

あとでわかったことだが、Yが落ち着かなかったと思われる理由の1つは、文化祭に向けて班替えをしたのだが、「前の班に、どうやら彼が想いを寄せていた女子生徒がいたらしい」とのことだった。これもある班長が教えてくれた。もちろん、次の班でまた彼女と同じ班になったYは、少し落ち着いた生活に戻ったのだった。

## (6) Sを私の班に

1989年の転勤でM市内のK中学校に異動になった私は、2年生の学級担任になった。同じ市内でも前任のO中はまわりに田畑の残りのどかな環境だったが、K中は住宅地の中であって、保護者の進学に関する関心もかなり高い地域のように感じられた。中学校に近い高校も二つとも進学校であり、そのせいか学校のまわりに塾も多く、ある塾の3年生コースは深夜2時までやっているということだった。そんな状況もあってか、はじめは生徒たちの雰囲気もなんかそっけなく、あまり温かみがないような感じがした。(もっとも、あとでそれは私の誤解だったことがわかるのだが)

2年目にそのまま3年生に持ち上がったが、生徒たちと何となくしっくりこない感覚を抱えながら夏休みを迎え、私は、クラスでキャンプを企画することにした。自由参加ではあったが30人以上が参加し、自転車で20km近い距離のキャンプ場で1泊することになった。ルールは「危険なことをしないこと」と、「迷惑をかけないこと」の2つだけ。到着後に、生徒たちは自然の中で伸び伸びと遊んでいた。

夕食後に、焚火を囲んで夜も更けて来た頃、何がきっかけだったかはわからないが、気が付いたら「青春討論会」が始まっていた。「部活動が終わって何か気が抜けてしまったようになってる」「そろそろ受験に向けた勉強を頑張らなければと思うが、思うように集中できない」「進路をめぐって親と意見が合わずに困っている」「友人関係がぎくしゃくして、つらい思いをしている」「友人がつきあってた彼女と別れてしまい、落ち込んでいて可哀そうだ」「最後の文化祭に向けて展示や合唱を頑張りたいが、クラスがまとまらず心配だ」……。

そんな中、Tという生徒の1学期のある教科の成績について訴える生徒がいた。「Tの理科の成績が『1』だったのはおかしいと思う。確かに授業中に落ち着きのないこともあったけど、それはTだけではないし、定期テストの点数もそ



んなに低いわけではない。先生が気に入らなかったから、Tに対して差別したんだと思うよ」

それに対して、同じように感じている生徒たちが多かったようで、同様の意見が相次いだ。Tは確かに落ち着きのないところもあり、まわりに迷惑をかけることもあったが、根は人懐っこく、悪気もない素直な生徒でもあった。そんな彼がつけられた成績への疑問に対して、自分のことのように異議を唱える生徒たちの正義感に私ははっとした。私はこの時、それまでクラスの生徒たちに感じていた「ある種の冷たさ」が表面的なものであり、本当は前任校の生徒たちと何ら変わらない気持ちを持っているのだと理解し、自分の誤解を恥じた。学校の中では自由に意思表示できなかった多くのことが、壁を取り払ったところで、一気に噴き出してきたのだ。私はすこしホッとして、そんな正義感をもってた彼らを少し頼もしく思ったのだった。

このクラスにSという生徒がいた。彼は、クラスメートに迷惑をかけるというわけではなかったが、やや怠学傾向にあり、学校を休むことも多かった。また一時期シンナーを吸引するという問題行動もあり、私は3年生後半の進路選択に向けてどのように彼にその意識を持ってもらおうか思い悩んでいた。

文化祭も終わり、そろそろ受験勉強に力を入れ始めなければならないという時期になって、班替えをすることになった。班の構成について班長会で話し合っている時に、どの班がいいか意見がまとまらなかったのがSの所属についてだった。どの班長も、自分の班に入れることに多少の抵抗感があるようだった。話し合いが進まなくなったところで、私は、つぎのような話をした。

「受験は、どの高校を志望するにしても、誰にとっても大変だよ。一人ひとりが孤独な状況で乗り越えなければならない壁だけど、せめて学校にいる時だけでも、みんなで励まし合って勉強できるような班にしたいと思うんだけどどうかな。もちろん、Sも入れてだよ。学校を休むことも多いし、今はまだ進路希望もはっきりしていない。勉強にも集中できていないようだ。でも、卒業の時までは、進路先を決めなければならないよね。そのためには、『みんなで一緒に取り組んでいこうよ』って言う必要があると思うんだ。Sに誰か声をかけてくれる班長がいるといいんだけど……どうかな。Sも含めてこのクラス全員が自分の進路目標を達成できるようなチャレンジが、みんなでできるといいと思うんだけど」

そうは言っても、どの班に入れてもSに声をかけること自体が簡単ではないことは予想できる。しばらく沈黙が続いた後、班長の一人Fが口を開いた。「Sは私の班に入ってもらいます。私の隣の席に座ってもらい、わからないところはできるだけ私が教えたいと思います」

まわりの班長たちは、ちょっと驚いて、同時にほっとしている。

Fは、全校生徒会の役員もやり、卓球部の部長もやり、地区生徒会の地区長もやり、クラスでは班長もやっているという生徒だった。自分から何でもかんでも買って出るといふタイプではなかったのだが、まわりの信頼も厚く、頼まれれば引き受けてくれる頼りになる存在だった。彼女の希望する高校は、県内でも有数の進学校で、合格ラインもM市内で一番高かったが、彼女は塾にも通っておらず、自分の力で受験に向けて努力をしていた。一方で、私の担当する社会科の授業ノートには、要点をマンガの人物の会話でまとめたり、私が授業中話した雑学やダジャレも記録するなど、勉強を楽しんでやっ

ている余裕が感じられるところもあり、感心させられた。

Fをめぐっては、こんなエピソードもあった。この年は、県の入試制度が変更されて「普通科の推薦入試」が初めて導入された年だった。この頃は、普通科だけでなくそれ以外の推薦も含めて、推薦受験は「学校代表」的な校内選考だったので、その高校を一般受験しても合格可能性が高いということを前提に中学校から推薦していた。校内選考に向けての委員会の後に、私は学年長から呼ばれて、「Fが希望している高校に彼女を推薦してはどうかと委員会で全員一致になった」と告げられた。

私は、「希望調査では彼女は推薦を希望していません」と話したが、学年長は、「もう一度保護者の意向も含めて確認してくれないか」と言う。そこで、もう一度彼女の意思確認をすることにした。

「校長先生も含めた進路の委員会で、ウチの中学校から希望校に推薦をしたらどうかという話があったんだけど、どうかな？」

彼女の答えは即答だった。

「お話は有難いのですが、みんなと同じように一般受験して合格したいので、推薦での受験は希望しません」

私は、彼女の決意の立派さにちょっと恥ずかしいような何とも言えない気持ちになり、「そうかわかった。では、先生方にも伝えておくから」と中途半端な答えしかできなかった。

その後Fは、学校では自分の隣のSの勉強の面倒を見ながら、家でも努力を続け、一般受験で希望の高校に合格したのだった。

## (7) 真冬の雪合戦

近年、県内の中学校では教室に授業時間割表が張られなくなった。当然、年度初めには各クラスの基本的な時間割を作るのだが、授業時間数の実質的確保という名目で自習を極力少なくするため、その週の出張や年次休暇等の教科担当の授業を全部振り替えて、月ごと、学期ごとに全体の授業時間数を調整するという作業を行っている。そのため、教務担当は毎週、翌週の時間割を作成することになり、実質的に教室に固定時間割を張る意味がなくなったのである。私も教務担当をしていた時には、翌週の時間割を提示する前日には毎週のように深夜1時～2時ごろまで時間割の調整に追われていた。

M市K中での3年め、1年生の学級担任をしていた冬、ある日数学の先生が体調不良で急に休むとの連絡があった。朝の学年打ち合わせで誰が補欠に入るかという相談があり、自分のクラスの数学の時間は私も自分の授業がなかったので、補欠に入ることになった。「急のことだったから、自習課題はないそうだ。社会科に振り替えて授業をしてもいいぞ」と学年長から話されたが、

「今日は、別に社会科の時間もあるので、生徒たちに数学で今やっているところを聞いて、その内容の練習問題のページをやるように話します」と答えた。

朝の会の連絡で、数学の自習のことを話すと、早速生徒たちからこんな声があがった。

「先生、自習課題がないんだったら、学級レクをやってはいけませんか？」

「練習問題のページはそれぞれ家でちゃんとやってきますから。クラスのみんなで何か一緒にレクをやるって、学校でしかできないからやらせてください」

私は、授業の時間に学級レクをやるのは他のクラスや他の先生たちの手前あまり気が進まなかったが、学年長の先生に相談してみることを生徒たちに話して職員室に戻った。

学年長は、「授業中に学級レクをやって良いとは言えないが、まあいいか」と黙認してくれた。

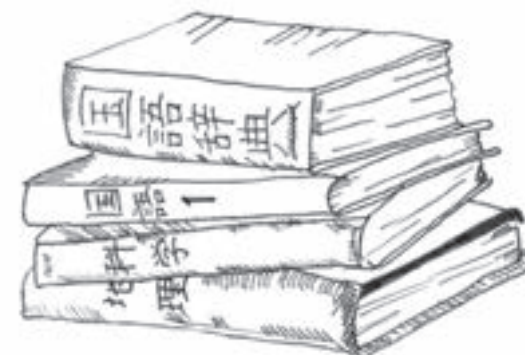
教室に戻ると、生徒たちは大喜びして「バスケットをやりたい！」とか「今朝は雪が降ったから雪合戦をやろう！」とか言っている。多数意見だった雪合戦をやることになったが、決まったあとで私は次のような話をした。

「2学期になって、文化祭などの行事や生徒会・学年生徒会の取り組みなどが続いていて、学活（学級活動）の時間をクラスで企画するものに充てることができなかったから、今回その機会にできるけど、もし、数学の先生が「次の学活の時間を数学にほしい」と言ったら交換で授業はちゃんとやるんだよ。それから、今日の分の練習問題は、それぞれ家でちゃんとやってくる。あと、バスケットを希望した少数派の人たちはこだわらずに譲ってくれたわけだから、3学期の学級レクは、今度はバスケットで企画してみよう」

こうして、数学の自習は学級レクの雪合戦になったわけだが、生徒たちの歓声が校庭に響いてもそのことを咎められることもなかった。

今の学校は、おそらくそのようなことを許容してくれる状況にはないのだろう。まだ、「学校五日制」が導入される前の話であり、今より授業時数にも若干余裕があったようにも思う。しかし、それよりも当時は全校や学年での“しぼり”があまり強くなく、学期に1回ぐらいは学級レクを独自に企画できるような自由度もあった。生徒たちが、自分たちの関係性を協力的な方向に深めたり、クラスや学年などの集団を民主的な方向に高めたりするためには、自分たちで何か一つのことを話し合い、決定し、実行し、総括するということの積み重ねが必要だと思うのだが、それは、教科の授業だけではできないように思う。運動会、文化祭、宿泊研修・修学旅行などの行事の取り組みや日常の班やクラスの活動、生徒会の活動などの様々な場面で、そのような場を作っていくことが必要だ。学級レクや休み時間などの遊びの時間も重要なその機会になると思う。

数十年前の自分の子ども時代の体験から言えば、何もない野原で“ガキ大将”を中心に異年齢集団で遊ぶことから、ルールづくりとそれを守ることの大切さや、トラブルが起きた時の解決の仕方や、小さい子や弱い立場の子への配慮など、子どもの関係づくりにおいて大切な大概のことを体験的に学んだ。今の子どもたちには、その機会が圧倒的に少ない。誤解を恐れずに言えば、学校の休み時間、放課後の時間などでもっと自由に遊ぶことができる時間があれば、いじめも不登校も減少するのではないかと勝手に思っている。



## (8) 頭髪規制の解除を生徒たちが主体的に実現するために (前編)

昨今、『ブラック校則』の問題が話題となっている。学校生活に関する規則の中に、合理的に説明ができない理不尽なものや、過度に厳しいものや、さらには人権侵害にあたりそうなものが多くみられるということが取り上げられているのだ。

子どもの人権といえば、『子どもの権利に関する条約(子どもの権利条約)』が、1989年11月20日に国際連合総会において全会一致で採択され、日本は1994年4月22日に158番目の批准国となっている。しかし、国や全国の自治体で、子どもの権利について様々な施策が検討・実施されてはいるものの、現在に至るまで、子どもが大人になるまでの成長のすべての過程を、子どもの権利を中心に据えて考えていこうという状況はまだ実現できていないようにも思う。

いじめや不登校など子どもたちの問題状況の断片(それ自体重大な問題ではあるのだが)はよく取り上げられているが、子どもたちの最善の発達を保障するという観点に立って、学校生活における子どもたちの権利保障や、子どもの権利条約と照らし合わせた校則の検討・改正などを総合的に考えていこうということは、まだ不十分な状況にあるのではないだろうか。

さて、1992年の転勤で、正規採用になってから3校めの勤務校となったのが中山間地域にあるK中学校だった。K中のあるK町全体が、いわゆる「僻地指定」の学校がある地域で、当時は「準僻地」から「5級僻地」までの小学校13本分校、中学校7本分校(うち併設校5校)があった。それでも、K中の生徒数は270人ほどおり、各学年3クラスずつと支援学級1クラス、計10クラスの学校だった。教職員は、管理職を除いて経験校2～3校めの20歳代後半～30歳代前半がほとんどで、同世代が多いせいか職員室は活気にあふれていた。

その頃、学校挙げて課題となっていたのが、いわゆる「頭髪(男子の丸刈り)規制」をどう解除するかという問題だった。1970年代後半～80年代前半、学校の全国的な「荒れ」の中で、「指導事項」として生徒手帳にも記載のない決まりを導入し、学校が落ち着きを取り戻しても、その決まりがそのままになっていたということだった。

この問題の一番簡単な対応策は、校長が「この決まりをなくす」と言えばそれで済むのだが、前年度までの生徒指導部会・職員会議では、「生徒たちに規制解除の意義などを考えさせるためにも、自分たちが関わる何らかの取り組みが必要ではないか」という意見が多かったようだ。しかし、全校の生活向上の取り組み目標(例えば一定期間遅刻ゼロ、忘れ物ゼロなど生徒たちが設定した目標)を達成できたら頭髪規制を解除しようという取り組みがなかなか達成できないでいたとのことだった。また、保護者には丸刈りに反対の意見もある一方で、賛成の意見も多く、保護者の理解と合意形成をどう進めるとかという課題もあった。

生徒指導部の所属となった私は、ある時の会議の中で、意見を述べることになった。「そもそも頭髪規制を解除するというのは、その規制が人権問題に関わるからだと思う

んですが、人権というのは何かの条件と引き換えになるようなものではなくて、生まれた時から誰もが持っているというものですよね。ですから、何かの取り組み目標が達成できたら・・・という条件をぶら下げて解除する、しないを考えるのはどうかと思うんです」

「でも、校長が規制を解除するだけだと、生徒たちは関わらなくて済んでしまうわけだから、そのことを大事にしないのではないのでしょうか」

「そうですね。だから、校長先生から一方的に解除してもらうのではなく、自分たちで権利として宣言する形にするのはどうでしょうか?」

「????」

「生徒たちが自分たちで権利宣言をする。でも、そのためには、どうしてその宣言をすることが大事なのかとか、それを守っていくためにどうすべきかとか、地域や保護者にどう理解を得るかとか・・・いくつかの課題を解決するために、全校生徒で学習しながら取り組む必要があると思います」

「大変そうですね」

「そうですね。1年がかりの取り組みになりそうですね」と言いながら、私は、生徒たちを主役にした取り組みがどう展開できるか、全校・学年の生徒会担当の人たちと協力しながら考えていこうと決意を固めたのだった。

5月の定例生徒総会で、生徒有志から「頭髪自由化についての緊急動議」が出された。提案趣旨の発言をしたのは、1年生の時から自分の信念で丸刈りを拒否してきた3年生だった。要望の主な理由は、①大部分の生徒が自由化を希望している ②現在の学校は様々な活動に生徒会中心に取り組み成果をあげている ③自由になっても自分たちで責任を持てる ④もともと頭髪はどんな理由によっても強制管理されるものではない、といったものだった。

生徒会執行部は、「今後、自由化に向けて話し合っていく」として、この動議を受け入れた。しかし、この後、何についてどう話し合えば良いのかがはっきりしないまま、夏休みまでめだだった進展もなく経過していった。

なかなか進まない焦りとあきらめムードの中で、3年ほど前から積み残しになって来たこの問題を何とか年度内に解決したいと、教職員側も検討委員会を立ち上げて生徒会を支援することになった。その中で、1学期の状況をふまえて、次のような提案をした。

「現状を分析すると、①議論の不足(3年生のあきらめ、執行部の取り組み不足、クラスなどからの要求不足) ②きまり違反の増加(無関心、気のゆるみ) ③保護者の意見集約の遅れ、などが見られる。しかし一方で、①生徒会役員選挙の公約などに意識の継続が見られる ②会話や行動などに自由化への意識が見られる ③学校祭の企





画に関連する取り組みを執行部が模索している、など希望が持てる材料もある。議論が盛り上がらなかったのは関心が薄かったからではなく、何をどのように取り組んでいけば自由化が実現できるのか、はっきりとした見通しが持てなかったからではないか。『生徒たちを主体として教職員は支援する立場に立つ』ことを基本にしながら、取り組みとして①緊急動議への回答 ②討論の場の設定 ③保護者の意向の確認 ④取り組みの内容と手順の確認 ⑤生徒会を中心とした取り組みの実行 ⑥人権教育の充実、などを次の定例生徒総会（11月）までに進めていったらどうか

この提案を検討委員会と職員会議で承認してもらい、生徒会執行部と教職員の合同委員会をつくって取り組みを進めていくことにした。

その後の取り組みは、次のような流れで進められていった。

- (1) 10月末の学校祭で、校内外の人たちから広く意見を聞くために、意見発表会を企画する。（卒業生・保護者の代表も含めて）
- (2) 11月初めに生徒会として「頭髪規制の見直しに取り組むのか（再確認）とその理由、見直すとしたらどのような見直しが良いか」というアンケートを取る。
- (3) アンケート結果をもとに、取り組む方向性がまとまった場合は臨時生徒総会を開き、「全校で見直しに取り組む」という決議を上げる。
- (4) 11月中旬に、保護者の意見を参考にするためにアンケートを実施する。
- (5) 2つのアンケート結果をもとに、生徒会としての取り組みを全校集会などで話し合いながら、執行部は11月末の定例生徒総会に「頭髪問題の取り組みに関する議案」を提出する。

この議案の中で、生徒会は、自分たちの問題やそれに対する決意を保護者や地域の人たちに理解してもらうために、「署名活動」を提起して、賛成多数で可決された。こうして、何とか、取り組みの形が見えてきたのだったが・・・その先には、さらにいくつかのハードルが待ち受けていたのだった。

## （9）頭髪規制の解除を生徒たちが主体的に実現するために（後編）

11月下旬の生徒総会に生徒会・頭髪検討委員会から、頭髪規制（男子の丸刈り）の解除に関して、全校生徒へのアンケート集約をふまえて次のような提案があり、全校でのべ92人の発言ののち、全員一致で決議された。

### ＜頭髪規制の見直しについて＞

- (1) 髪に対しての規制
  - ①常識を外れた髪型をしない。
  - ②自己管理をしっかりする。
- (2) 日常生活の中での取り組み
  - ①自ら社会的な面の生活向上に努める。

- ②生徒会をさらに発展させていけるように努力する。
- ③何か問題が起きても学級・全校で真剣に話し合い解決する。
- ④全校決議をいつも頭におきながら生活する。

そして、生徒会としての決意を地域や保護者の人たちに理解してもらうために、11月28日～12月11日の2週間、「署名活動」（対象は学区内の小学4年生から大人）を実施して、目標の署名数が達成できた場合に、校長宛に要望書を提出することになった。

提案内容を検討する段階で、署名数のめどについて、職員側は当初「1,000人ではどうか」と検討委員会にはかった。しかし、生徒会側から「大事な問題なので、ぜひ1,500人で提案させてほしい」との申し出もあり、1,500人を目標に署名に取り組むことになった。当時のK町の人口は約1万人だったが、学区内には数千人だっただろうか。約270人の全校生徒が、1人5人以上を目標に署名を集めようということになった。こうして、生徒全員による2週間の「署名活動」の結果、1,531人の署名を集めることができ、この署名を添えて、12月25日に校長に要望書を提出することになったのだった。

しかし、「署名活動」終盤になって目標数集約の見通しができてきた時に、校長から次のようなことを言われた。「署名が集まってきているようだが、生徒たちは、家族や小学生など簡単に頼める人たちにお願いで集めているのではないだろうか?」「いえ、決してそうではありません。みんな一生懸命に集めています!」と言いたところだったが、私も実際の状況把握はあまりできていなかった。そこで生徒たちに、緊急に署名集めの状況についてのアンケートを行い、職員会議で報告することにした。

そこからわかったことは・・・

- ・お願ひした人に対して署名をしてもらった人の割合は85.4%
- ・署名をもらった人のうち大人の割合は76.1%（小学生・高校生は23.9%）
- ・署名を「簡単にもらえた」「どちらかといえば簡単にもらえた」と答えた生徒は60.3%
- ・署名を「もらうのが大変だった」「どちらかといえば難しかった」と答えた生徒は39.7%

また、活動のようすについては次のような状況の記載があった。（一部）

- ・親から署名をもらうのが難しかった。いろいろと説明してなんとか説得した。
- ・最初はみんな反対だったが、説得して署名をもらった。思ったよりも署名をもらうのは大変だった。
- ・賛成してくれない人を納得させることができなかった。納得してもらえるようにしたい。
- ・小学生に「自分たちが中学校に入るときに丸刈りでなくなるの?ラッキー!」と言われたので、「簡単に自由化になるわけではないからプリントをよく読んで理解してから署名してね」と話した。
- ・高校生に「自分たちが卒業してから自由化するはずない。(でも中学生の時に活動しなかった自分たちも悪いけど)」と言われた。「ずるい」と言われて反対されるとは思わなかった。
- ・署名をお願いする時に反対の人が多く、説得して書いてもらうことが多くてつらかった。でも、この取り組みをやって良かった。また自由化に一步近づいたようでうれし

かった。説明のために30分も正座していた時は足がしびれてしまい大変だった。  
・署名してくれた人はK中の生徒を信頼してくれているということだと思うので、これからはその信頼を裏切らないようにしたい。

もちろん、署名をしてくれた方々の中には、頭髪規制の見直しに対する生徒会の方針や取り組みに理解を示して、激励とともに署名に応じてくれた人も多かったのだが、同時にアンケートからは生徒たちの苦勞もしのばれた。ともあれ、生徒会から校長宛に要望書が提出されたことを受けて、2学期末に、教職員側の検討委員会で要望書への対応について話し合いがもたれた。

校長からは「地域の人たちからは現在の決まりを守っていない生徒への批判もある。スタートを揃えるためにも一旦全員が短くした方がよい」との話があった。これに対して、賛成・反対様々な意見があり、私は「一回切って揃えることを条件にすると人権の問題も含めて学習してきた方向と反することにもなり、生徒たちの不信を招きかねない」と主張したが、話し合いはまとまらなかった。

教職員側で何回か話し合ったあと、生徒たちにもスタートの形について意見交換の場を設けようということになり、校長から考えを話してもらうことになった。3学期のはじめに、要望書への回答として「①スタートを同じにするために違反していた生徒は短くするようにしてほしい ②生活向上の決意を行動で示してほしい」との全校生徒たちに対する要望が話された。また同時に、生徒たちの意識を把握するために再度アンケートが実施された。

アンケートには、「今まで伸ばしていた生徒には一回切ってほしい」との声も相当数あったため、実際に意見交換の場を持つということになり、生徒会検討会、臨時生徒総会を設定した。しかし、議案を検討するための検討会では「今までの取り組みで十分だから全員が切って揃えなくてもよいのではないか」という意見が大勢をしめ、その方向で提案がまとめられることになった。

臨時生徒総会でも、「今まで伸ばしていた人たちの理由を聞いた上で、しっかりとした考えを持っているのであればみんな納得できるのではないか」という意見もあり、それに対する賛成意見、生徒会検討委員会提案に対する賛成意見も多数出され、結果的には提案どおり「現状のままでのスタートを校長に要望すること」が決議された。

こうして、生徒会から校長に再度要望が出され、これを校長が受け入れる形で、2月上旬の見直し決定となっていった。そこに至るまでの道のりは長く、先の見えないカーブの連続だったが、学校からの一方的な解除通告でもなく、また、決まりが形骸化した結果の容認でもなく、「生徒会を主体としながら生徒全員をできるだけ議論や行動に参加させること」を追求した道のりでもあった。

その結果、生徒総会の場などでも安易な多数決は避けられ、賛成や反対の意見をはっきり出していくということが積み重ねられていった。そして、何より決まり見直し



の問題が、自分たち自身の問題であるという意識が全員のものになったことは大きなことだった。

しかし、取り組みは終わると同時に風化が始まることもまた避けられないことだ。そこで、毎年2月上旬に、頭髪規制の解除が認められたことを記念する集会をもち、体育館のステージ脇に掲げられた『全校決議』の内容について、

- ・自分たちの学習や生活を高め合うことをめざして活動に前向きに取り組む
- ・問題が起こった時は話し合いで解決していく
- ・生徒会をさらに発展させていけるように努力する

などの観点で、自分たちの現状について話し合い、確認していく場を持つことにした。そして、そのことが『全校決議』を本当に自分たち自身のものにし、新しい生徒会の理想を追求することにつながるよう願ったのだった。

## (10) Uの決意の受け止め方

K中2年めは2年生の担当で、担任は外れて学年長となった。学年は、3クラス84人の生徒たちで、学年所属の教員は5人だった。

2学期に、3年生から生徒会役員を引き継ぐ役員選挙の取り組みを行うことになり、私と学年生徒会担当の先生とで基本方針を相談し、学年の先生たちにも理解をしてもらって、「学年の全員で、どんな生徒会にしていきたいかという基本的な方針を考えて、それを公約として全校生徒に訴えていくこと」と「可能な限り多くの生徒たちに立候補してもらって、選挙戦を通して次期生徒会執行部を選出してもらうこと」を取り組みの中心にすえることにした。その後、生徒会を引き継ぐにあたっての基本的な姿勢について学年の生徒集会で確認した後、各クラスで生徒会のそれぞれの役割に誰が立候補していくかについて話し合っていた。

その結果、3クラスから15の役職、19人の定員に28人の立候補者があり、生徒会長から専門委員長まで選挙戦が行われることになった。そして、役員選挙に立候補しなかった生徒たちも、自分のクラスの候補者の選挙活動（ポスターや小道具の製作、朝の挨拶や昼のクラス訪問など）に参加して活動することになり、学年の生徒たち全員が何らかの形で生徒会役員選挙に関わっていった。

生徒会役員選挙の結果が決まった後、続いて学年生徒会の役員選挙も行われ、全校の役員選挙で残念ながら落選した生徒たちも、再度、積極的に立候補する中で取り組みが行われた。そして、投票による信任を受けた生徒たちが、学年生徒会の役員となっていた。

ところが1人だけ、「執行委員」の選挙で落選した生徒が出た。全校生徒会の役員選挙と学年生徒会の役員選挙のどちらにも立候補して、どちらも落選してしまったのだ。それがUだった。彼女は、真面目だがどちらかというとあまり活発に自分の意見を言う方ではなく、そのためか生徒たちから積極的でないと受け取られたのかもしれない。

このことについてどのようにしたらよいか、学年の生徒集会で話し合うことにした。話し合いでは、「選挙の結果は結果だから、そのまま良いのではないか」という意見や、

「選挙について、取り組みの始めから学年のみんなで話し合ってきたのだから、どのようにしたらよいかについてもみんなで考えたい」といった意見が出たが、しばらくして話が行き詰ってしまった。

その時、ある生徒から質問が出た。

「先生たちに聞きたいのですが、生徒手帳の生徒会規約には全校生徒会の役員について定数の決まりが書いてありますが、学年の生徒会役員については、役員ごとの定数などの決まりはあるんですか？」

学年生徒会担当の先生が代表して答えることになった。

「決まった定数はありません」

「では、学年ごとに学年生徒会の役員の数は違っていいということですか？」

「そういうことになるね」

「では、現在の学年生徒会の執行委員の数を増やしてもいいってことですか？」

「この場を学年総会に切り替えて、誰かが執行委員の数を増やすことを「動議」として提案して、賛成意見と反対意見を聞いた上で、採決して決定すれば増やせるということになるんじゃないかな」

少しの沈黙の後である生徒が意見を述べた。

「Uさんは、残念ながら2回も落選したんだけど、2回も立候補したということは『生徒会役員として頑張ってる仕事をしたい』という決意の表れではないかと思うんです。だから、その決意を活かしてもらおう場を作るということも良いのではないかと思います。学年のみんなが良ければ学年生徒会の執行委員の定数を増やすことにして、その上で、Uさんがもう一度立候補の決意をしてくれるのであれば、学年のみんなの信任を確認して執行委員になってもらうことはどうでしょうか」

その場で議長が選出され、その意見を取り上げることになり、その後クラスごとに話し合った上で、全体で意見を聞いた上で決めることになり、執行委員の数を増やすことが決定された。最後にUの気持ちを確かめることになり、Uもみんなの気持ちを受け入れて、改めて決意表明をしたのだった。そして、その場でUの信任も確認された。

その後の学年生徒会活動では、Uが自分の役割に責任を持って、しっかりと頑張ったことは言うまでもない。



## (11) 金髪の意外な理由

5年間の県北地域勤務を終えてM市に戻って2年目の1998年、市内のS中学校で持ち上がりの3年生担任になって1ヶ月ほどしたある日の朝のことだった。

「先生、Kの頭が大変です！」と、クラスの生徒が職員室に駆け込んできた。

それは朝の会が終わり、創立50周年の一環で、全校生徒による人文字の航空写真撮影のために校庭に移動しようとしていた時だった。Kは朝の会の時にはまだ登校してなくて、家に電話しようかと思っていたところだった。

「Kの頭がどうした？」

「金色です！金髪に染めたみたいです」

教室に戻ってみると、Kがカバンを棚にしまおうとしているところだった。

「K、その頭どうしたんだ？」

「どうしたって、別に・・・」

「別って、とにかく事情を聞かせてくれ」

Kは、さほど抵抗もせずに職員室に一緒についてきた。そして、私と学年生徒指導担当のM先生とで彼に事情を聞くことになった。しかしその時には、それから6時間も彼の話を聞くことになるとは考えもしなかった。

時々黙り込む彼を促しながら聞き出した「事情」は、小学校2年生まで遡ることになった。2年生の時に両親が離婚したこと。1年生までは勉強も好きだったが、家が落ち着かず集中できなくなったこと。3、4年生の頃にやり直そうとしたが挫折したこと。父親を「ミルク代までパチンコにつぎ込んだ」と非難していた母親が、離婚後はKの小遣いまでパチンコ代に充てるようになったこと。学区外通学のため近所に友達もなく、寂しい思いをしていること。勉強も運動も苦手で、みんなからもバカにされるため学校に来るのもイヤなこと。卒業後のことも気になり始めたが、誰にも相談できずにいること・・・etc.

話が一区切りついたところでKに聞いた。

「ところで最初に戻るけど、どうして金髪に染めてきたんだ？」

「だって言っても笑われるだけだし・・・」

「笑わないよ。約束するよ」

Kはポツリポツリと話し始めた。

「オレ、県で一番合格が難しいっていう進学校を受験しようかと思ってさ」

「えっ？」

「この前進路希望調査の時に、先生は『諦めずに目標を高く持とう』って言ったじゃん」

「そうだったな。だけど、それと金髪にすることどう関係あるの？」

「だってさ・・・、先生たちは県で一番合格が難しい学校の生徒であれば、何をやってどんな格好をしたって怒らないんでしょ。だからさ、オレもまず自分をそういう状態にして、それからその学校に入れるように勉強を頑張ろうと思ってさ・・・」

「・・・!？」

理屈としては全然合理的ではないが、彼なりに考えてのことだったのだろうと思い、頭ごなしに否定することは思いとどまった。

「そうか、でも見かけが先じゃなくて、まず自分の中身をどこに行っても自信を持てるようにする方が先だと思うよ。そのために必要なことを、一緒に考えて準備していこうな」

Kは、すっかり力が抜けてソファにしょんぼりと座っていた。気が付けば、もう夕方に近くなっていた。M先生が、「K、今から床屋に行こう」と声をかけてく



れた。Kは、黙って立ち上がった。

彼の生い立ちや、家庭環境を変えることはできない。私たちには、生徒たちに寄り添って話を聞き、一緒に考えることができるだけだ。自分の将来を切り拓くことができるのは彼ら一人ひとりなのだから、その自立ができるように、可能な限りの支えになろうと改めて思ったのだった。

## (12) S 教頭の涙

S中2年めの夏休みも終わり、文化祭取り組みの企画を始めた頃のある日、昼休みに生徒会室で執行部会議をしていた私のところに、クラスの生徒たちが駆け込んできた。「先生、Kが大変です！さっき、安全ピンで耳に穴をあけました。今、何人かで保健室に連れて行って手当をしてもらっています」「そうか、ありがとう。区切りがいたら行ってみるから、保健室のT先生によろしく言っておいてくれないか」「わかりました」と言って、生徒たちは保健室に行った。

一区切りついたところで保健室に行ってみると、KがT先生に耳の傷の消毒をもらい、「ピアスをしたのなら、自分でお金を稼げるようになってからちゃんと病院に行ってやってもらうんだよ！」と諭されているところだった。「そろそろ5時間目が始まるから教室に戻ろう」と促すと、Kはおとなしくついて来た。

その日の5時間目は学級活動の時間で、文化祭取り組みの役割を話し合う予定になっていた。話し合いが合唱の係にさしかかって指揮者の立候補をとったところで、突然Kが手を上げた。今まで、どんな係も自分から率先してやることはなかったKが手を上げたので、まわりの生徒たちもびっくりしている。「朝練習にちゃんと来るの？」

「みんなに歌の指導はできるの？」などと、Kへの質問が相次いだ。

結局、指揮者には3人の生徒が立候補したが、それぞれの決意を聞いた上で多数決を取り、Kは残念ながら落選となった。

それから約1ヶ月の間、教科展示の作品づくり、クラス展示の調査活動や展示物の制作、合唱練習などが進んでいった。

文化祭まで残り1週間ほどになったある日、帰りの会の合唱練習の時に、指揮者のYが「みんなが真面目に練習しないから、オレはもう指揮者はやめる！」と言い出した。そして、帰りの会では、どうしたらよいか話し合いになった。「一生懸命に歌っている人もいれば、そうでない人もいる。クラスがまとまっていない」「中学校最後の文化祭で、みんなと最高の合唱ができるように練習を頑張りたい」

私は、意見が一段落したところで、生徒たちに聞いた。「Yは、みんながちゃんとやってくれないから指揮者をやめたいと言っている。このままやめさせていいのか？みんなは、Yの指揮で合唱をしたいと思うのか？そうでないのか？」

「……………」

少しして、Kが恥ずかしそうに手を上げた。

「オレは、なかなか朝練習にも来られなかったけど、Yの指揮で合唱を歌いたい。だから、指揮者は続けてほしい」

それから、再度Yに指揮者をお願いしてみんなで頑張ろうという意見が続いた。

文化祭当日、みんなで練習に取り組んだ『聞こえる』という曲が満員の体育館に響き渡った。ステージの上には、汗をかきながら指揮をするYの姿や、その指揮に集中してついでいこうというクラスの生徒たちの姿、そして誰よりも大きな声で一生懸命に歌うKの姿があった。

歌い終わって、Kの肩の力が抜けるのが見えた瞬間、目頭が熱くなって慌てて横を向くと、近くに座っていたS教頭がハンカチを目に当てているのが見えた。体育専門の普段は厳しい先生だったが、目が合って声をかけてくれた。

「いい合唱だったな。Kがあんなに全力で歌うなんて思いもしなかった。みんなの思いを1つにできる文化祭はやっぱりいいなあ」

Kの歌声は、確かにS教頭の心にも「聞こえる」ものになったのだった。私は、思いが溢れて「はい」としか言えなかった。

## (13) ビリからの脱出

S中3年目は、前年度に卒業生を送ったこともあり、1年生の担当を希望して、そうなるものと予想していたがそうはならなかった。卒業式が終わった後少しして校長室に呼ばれ、2年連続の3年生担任を打診されたのだった。S中では、卒業学年の担任のうち1人は、進路指導の引継ぎもかねて次年度も連続して3年生担任を担当するのが慣例となっていたが、それが何故自分なのかはわからなかった。

理由を聞くと、あるクラスの担任と生徒たちの関係がうまくいかなくなってしまい、修復が困難になってしまったことと、前担任に反抗的な何人かの生徒のうち、中心になっていたKという生徒の兄が前年度の私の担任したクラスにいて、親とも話ができる関係があるだろうとのことだった。

そのクラスには、2年生の時点で学校になかなか登校できない生徒が4人いた。1人は家に閉じこもっていることが多い生徒、1人は友人との交友はある生徒、1人は登校してもクラスとは別な部屋で過ごす生徒、1人はリーダーだったが挫折して部活のサッカーだけしに来る生徒、といった具合だった。

4月の後半に、5月に行われる体育祭の選手をクラスで話し合う時間があった。当時のS中の体育祭は、県営運動公園の陸上競技場を借りて行われ、市中陸上選手選考の参考にもされるため、ほとんどが陸上競技種目という行事だった。

まだ、生徒たちの理解も十分でなかった私は、「自分たちで話し合っているんですか？」という生徒たちに、1つだけ条件をつけることにした。それは、「選手の決定はクラスの

全員が納得して行くこと」というものだった。ついでに、「去年は学年7クラス中何番目だったの?」と聞くと、口をそろえて「ビリだったよ～!」との答え。「じゃあ、気楽にいこうよ。1つでも順位を上げることができればいいじゃん」と慰めにもならない激励をした。

黙って見ていると、男女別々に話し合いの輪ができていく。男子は立候補制で、運動の得意な生徒、意見の強い生徒から種目が決まっているようだ。女子は、学校に登校できない3人の生徒の種目をどうするかで困っているようだった。

時間の半分ぐらいが経過したところで、Tという生徒が私のところに相談に来た。「先生、みんなが3000m走に出てくれて言うんだけど、オレ、完走できる自信がないから迷っています。途中で棄権してもいいですか?」

「棄権って、例えば10回走ったとしたら何回ぐらい棄権する可能性があると思う?」

「う～ん、・・・5回ぐらいかな」

「じゃあ5回は完走できる可能性があるってことだね。ところで、棄権していいかわからないから、職員室に行って、体育のS先生に聞いておいで。その間、保留にするから」

「じゃあ、S先生に聞きに行きます!」と言って、Tは教室を出て行き、しばらくして戻って来た。

「先生、S先生が『どうしてもムリなら棄権してもいい』って言っていました」

私は一旦男女別の話し合いをストップして、クラス全体で確認の場を持つことにした。「男子の3000m走だけど、Tから棄権が心配っていう申し出があって、確かめたら棄権することはできるそうだ。でもその場合、完走でもらえる1点は入らない。誰か、確実に完走できる人を選ぶっていう選択も考えられるけど」

「・・・」

3000m走は男子の種目の中でも一番キツイ種目なので、みんな黙っている。「じゃあ、もし棄権することになっても責めないってことで、Tにみんなからお願いしていいのかな? T、やってくれるかな?」

「お願いしたいです」との声が何人かあり、

「それなら、オレ、やってみます」とTは受けてくれた。

もう一つ、女子の種目ではハードル走の選手がなかなか決められないでいた。

「先生、Mさんをお願いしてもいいですか?」

Mは、ほとんど登校していない生徒で、運動も得意ではない。私は、担任としての考えを話すことにした。

「みんなは、あまり登校できない4人に、『体育祭に参加しようよ!』とか、『応援だけでも一緒にやろうよ!』とか、誘う気持ちはないのかな? 仮に99%参加が難しいとしても、Mが残る1%で来た場合、ハードルの選手だと知ったらもう卒業まで来なくなるんじゃないか。Mを誘うなら、彼女が練習なしでできる幅跳び以外は難しいんじゃないか? 幅跳びなら10cmでも参加記録になるん



だよ」

「・・・」

少しの沈黙があって、Aが手を挙げた。

「私、ハードルやってみます。一応、陸上部だし。Mさんも誘いたいし」

彼女は、陸上部ではあったが砲丸投げの選手で、しかも、その後その年の夏に全国大会に出場して優勝することになったほどの選手(!)だった。私は、彼女の申し出を有難いとは思ったが、クラスの生徒たちがそのことをどう思うか、聞いてみたいと思った。「Aが砲丸投げに出るなら、1位になる可能性は高いと思うし、お姉さんの出した校内記録の更新もあるかもしれない。でも、みんなが本気でハードルをやってほしいと思うなら、申し出を受け入れてもいいと思うんだ。どうかな?」

「・・・」

沈黙の後、副委員長のIが手を挙げた。

「先生、女子のみんなでもう一度話し合ってみたくないので、少し時間をもらえますか?」

「いいよ。みんなで納得のいく方法があるかどうか、話し合ってみるといいね」

少しして、女子の競技リーダーから報告があった。

「話し合いの結果、Aさんには初めの案の通り砲丸投げに出てもらい、体育の先生にお願いして、全員でもう一度ハードルの記録を取って一番早いタイムの人に決めたいと思います」

それを受けて、議長がみんなに聞いた。

「今の報告・提案についてどうですか?」

男子からも賛成する意見があり、そのように決定することになった。私は、最後にもう一度念押しすることにした。

「あとは、この場にはいない4人にも確認してOKが取れたら正式決定にしよう。決まったら、クラスみんなで決めた選手だから、クラスみんなで応援できるようにしていこう」

体育祭当日は、私のささやかな期待以上に、クラスの全員が一生懸命に応援する姿が見られた。自分たちでアイディアを出し合って工夫した応援も楽しそうだった。そして、学校に来ることが難しい状況にある生徒たちへの配慮も、その後の学習や行事の際に生かされることになった。4人は競技に参加できたのかというと残念ながらできなかったが、競技場のスタンドの隅の方に、その姿を見ることができたのだ。

さて、競技結果はどうだったのか。私は昨年の最下位並みの結果を覚悟しながら、「順位はさほど重要ではない。みんなで団結したことや一生懸命取り組んだ価値こそ大切だ」という慰めの言葉を用意していたし、実際にそう思ってもいたが、結果は実に意外なものとなった。

当日最後の種目は、男子4×100mリレーだったが、リレーは男女とも学年上位は無理だろうと思っていた。しかし、何という天気のお悪戯か突然の雷雨の襲来となり、リレーが中止になった。その結果、何と1点差で学年団体総合優勝となってしまったのだ。実は、あの棄権を心配した3000m走のTは、午前中の競技で完走して1点の参加点を獲得していた。その1点のお陰で、優勝することができたのだ。

私は、行事のたびに、反省の資料として「活躍したと思う生徒を3人、理由を挙げて書いてほしい」というアンケートを生徒たちをお願いしていたが、男子200m走で1位

になったKや、女子砲丸投げで1位になったAと並んで、男子3000m走で最下位ながら完走したTの頑張りを上げる声が多かった。生徒たちの見方、考え方は、運動能力を生かして競技の1位を取ることと、苦手でも自分の限界に挑戦して完走することを同列に捉えるように育っていたのだった。

## (14) 笑顔を忘れてしまった君に届ける歌声

体育祭の取り組みを通じて、1学期のクラスのムードはますます良くなったとは思われたが、S中で3年生だけ担任することになったクラスを、1年間でどれだけ高められるか、試行錯誤のまま1学期が過ぎていった。

夏休みが開けて、10月初旬に行われる文化祭の企画についてクラスで話し合っていく時期になった。当時のS中の文化祭は2日間の日程で、教科作品の展示の他、クラスでテーマを決めて調査・研究したり制作したものの展示もあった。また、合唱コンクールは課題曲の他、クラスで自由曲も選曲して取り組んだ。その他、全校では生徒会による開閉会式や文化部の発表なども行われた。

クラスでも文化祭に向けて全員で取り組むことになり、学級会の時間を何回か持って、取り組みの目標、展示のテーマ、合唱コンクールの自由曲、それぞれの役割などについて決めていくことになった。

ある時、合唱コンクールに向けて話し合っている時に、自由曲の選曲について話題になった。音楽の先生からは候補曲が何曲か示されていたのだが、なかなか意見がまとまらなかった。話し合いが行き詰ったところで、「先生はどう思いますか?」と聞かれた。「最終的にはクラスのみならず納得して決めるんだよ」と前置きして次のように話した。「去年担任したクラスの自由曲は、審査員の先生方にも受けが良いコンクール向きの曲だったと思うけど、そういう云わば定番の曲の方が賞に入るためには近道なのかもしれないね。ただ一方で、最近の曲の中にはみんなのフィーリングに近い曲もあるので、比較的簡単でも自分たちの気持ちに近い曲を選ぶという選択もあるかもしれないよ。でも、その場合には入賞をめざすのは難しくなるかもしれないね。いずれにしても、クラスでどんな合唱の表現をめざしたいのかというイメージを共有する必要があると思うよ」

その後、生徒たちの話し合いが再開され様々な意見が出されたが、最終的に『笑顔を忘れてしまった君に』という、技術的にはあまり難しくないポップな感じの曲に落ち着いた。その曲の歌詞は、困難にぶつかって落ち込んでいる友人を励ます内容のものだった。

それから、指揮者やパートリーダーが決まって伴奏者を選ぶことになった時、ピアノ伴奏に真っ先に手を挙げた生徒がいた。前の担任に反抗的な態度をとっていた何人かの生徒



のうち、中心となっていたKだった。クラスのみならずびっくりして「えっ? Kってピアノ弾けるの?」とか言っている。実は、クラスには学年でも一番ぐらいピアノが上手いTという生徒がいて、伴奏は彼女ですんなり決まるのだろうとみんなが思っていたのだった。議長もどう進めたらよいか迷った様子だったが、ちょうどそこでチャイムが鳴ったので、結論は次の話し合いの時間まで保留ということになった。

私は、その日の放課後にKと話をすることにした。彼が最近友人たちとバンドをやっていて、ギターを担当していることは何となく知っていたが、ピアノを弾けるとは思っていなかった。

「さっき伴奏者に立候補したけど、課題曲と今日決まった自由曲の両方、またはどちらかの曲の伴奏をできそうかな?」

「……………」

「できる見込みがあって立候補しようと思ったんだよね」

「……………、まあ、これから練習してみればできるかもしれないと思ってさ」

「えっ?」

私はそれを聞いて、Tに伴奏を譲るように言いそうになったが、思いとどまった。Kが、何故絶対的に自信があるわけではない伴奏に立候補したのかが気になったからだ。私なりに推測したのは、少なくとも彼が何かの形でクラス合唱の取り組みに関わりたいたいと思ったということだ。

「確認だけど、指揮やパートリーダーではなくて伴奏者をやりたいんだよね?」

「うん」

「歌ではなくて、楽器をやりたいてことかな?」

「うん。指揮者はやりたくないし、歌は得意じゃないから。伴奏だったらできそうかなと思ってさ」

私は、Kの気持ちを受け止めずに、できるかできないかわからないというだけでその気持ちを否定してしまえば、彼は、練習にも参加しないのではないか、いや邪魔をすることだってあるかもしれないと思った。私は、Kがやる気をもって合唱に関われる方法がないかと考えて、思い切って次のような提案を試してみた。

「今回、クラスの自由曲に選んだ『笑顔を忘れてしまった君に』という曲は、ポップな曲調だから、ピアノとギターと一緒に伴奏できるんじゃないかと思うんだ。ギターをやってみないか?」

「えっ?ギターで伴奏やっていいんですか?」

「うん、音楽の先生に確認してみるけど、コンクール要項にはだめとは書いてないから、頼んでみるよ」

その後、音楽の先生にも確認をとり、翌日の学級会に経緯を説明して、自由曲の伴奏はピアノとギターでやることになった。もちろん、Kは伴奏者として練習にも熱心に取り組んだ。年配の先生方の中には、「合唱コンクールの伴奏にギターなんて前代未聞だ」という声もあったが、私はギターの伴奏もそんなに簡単でないことがわかっていたので気にしなかった。練習は、音楽の時間以外にも、朝の会・帰りの会での練習や朝練習にも取り組んでいった。

ある時に、パートリーダーの生徒たちが揃って職員室に来た。

「先生、合唱コンクールの自由曲、課題曲の楽譜をコピーしていただけますか?」

「えっ?誰かなくしたから追加で必要なの?」

「4人分お願いします?」

「4人分?」

事情を聞いてみると、学校に登校していない4人の生徒たちに、近所の生徒たちが交代しながら教えにいくのだという。私は、自分たちから進んでそのような取り組みを始めたことを知り嬉しくなった。そしてクラスの生徒たちが、自由曲に『笑顔を忘れてしまった君に』という曲を選んだ本当の理由がわかったような気がした。

## (15) 信頼の扉

2009年度末の人事異動で転勤の予定だった私は、内示の少し前に校長室に呼ばれた。校長から事前に告げられたのは、県立のT学園内に、2010年4月に開校する予定のH分校に行くてくれないかというものだった。

T学園の歴史は古く、明治41年にM市内の仏教各宗寺院37カ寺の住職方によって「感化院」として開設され、その後法改正によって「教護院」の時代を経て、1998年の児童福祉法の改正によって「児童自立支援施設」となった。

実は、98年の法改正当時から「学校教育の義務化」は打ち出されていたものの、県教委とM市教委の間で県立の施設への小中学校設置に関わる調整がなかなか進まず、2010年度からK中学校とM小学校の分校として開校することになったのだった。私の若い頃は、退職した教員が何人か講師として勤め、「学校教育に準ずる教育」の形で授業が行われていたが、ようやく正式な学校設置となり、その最初の教職員の1人として配置されることになったのだった。

学園に入所して来る生徒たちは何らかの課題を抱え、児童相談所や家庭裁判所の措置によって入所して来る。そして、寮生活をしながら自立のために必要な生活経験を積むとともに、学校教育を受けることになるのだった。以前は、いわゆる「ツッパリ」の生徒たちが多い時期もあったのだが、私が転任した頃は、入所するほとんどの生徒たちが、家庭環境の悪化等によって様々な問題や課題を抱えている状況であった。

私が3年間で担任した生徒たちは、生まれてから乳児院を始めに施設5ヶ所めの生徒、家庭内の虐待やネグレクトで保護された生徒、前の学校で怠学や家庭内暴力等の問題があった生徒、前の施設で女子生徒に性的いたずらをしてしまった生徒、大人に性的いたずらをされた生徒、1ヶ月ぐらいの間親に食事の世話をしてもらえず万引きしてしまった生徒・・・など、実に悲惨な状況下で課題を抱えざるを得なくなった生徒たちであった。

私は、1年めに中学2年生の担任になった



が、4月の時点でそのクラスにはSという女子生徒が1人在籍していた。初めて教室に入った時、そのSは、普通の学校の教室の3分の1ほどの教室の後ろの壁に自分の机とイスをくっつけて、不機嫌そうに座っていた。私がいろいろと話しかけても、答えが返ってこない。その状況は、それから2ヶ月ほど続くことになった。

2週間経ってもなかなか話をしてくれないSに困った私は、彼女を担当している施設職員に相談した。

「Sがなかなか話をしてくれないので、正直言って困っています」

「彼女は、施設に来た時から大人に対する強い不信感があって、特に安心できる関係が作れないうちは警戒心が強いです」

「どうしたらいいんでしょう?」

「じっくりと、関係ができるのを待つのがいいと思いますよ」

「こんな状態で大丈夫でしょうか?」

「でも先生、去年の後半の彼女は、寮の部屋に籠って登校しなかったので、学校に来るだけでまだいいんじゃないでしょうか。来てるってことは、何か期待を持っているってことかもしれませんし・・・」

2か月ほど経ったある日、私の心配はあっけなく解消することになった。ある日、児童相談所から「来週、中学2年生の男子生徒が入所になる」との連絡が入ったのだ。1年生の時からずっと1人のクラスで生活してきたSにとって、初めて同級生ができることになった。私はその日の帰りの会に、そのことをSに話すことにした。

「来週、1人転入生が来ることになったけど、席の並びはどうしたらいいと思う?」

「独り言になることを半ば覚悟しての問いかけだったが、意外にもSが口を開いた。」

「席は、横に並んで座りたい」

「えっ!? 今、何て言ったの?」

「2人で横に並ぶようにしたいってこと!」

「そうか、じゃあそうしよう。ところで確認だけど、教室の後ろの壁際でなくて、真ん中ぐらいに2人で並ぶってことでいいのかな?」

「いいよ」

「聞いてもいいかな。何で後ろの壁際に座ってたの?」

「・・・」

「無理に答えなくてもいいんだけど」

「去年の授業で夏休み過ぎから、教科の先生みんなとケンカして、その度に後ろに下がって行って、もうそれ以上下がれなくなった」

「あっ、そうだったんだ。でも、よく話してくれたね。」

それ以降Sは、一気に堰を切ったように会話をしてくれるようになった。私は、彼女と相談しながら、係の分担や朝・帰りの会のプログラム、掃除分担などを決めていった。

Sと会話ができるようになったポイントはどこにあったのだろうか。今思うとそれは、私が座席を一方的に提案せずに、彼女の考えを聞いたところにあったのではないかとと思う。幼児期から経験した様々な負の体験によって、いつしか大人を信頼できなくなった彼女は、特に、大人に何かを押し付けられることに強い拒否感を持っていた。だから、私が担任としてどう接するのかわ、彼女は2か月ほど観察していたのではないだろうか。

転入生が来ることになって、座席の配置を考えることになった時、もし、私が一方的

に提案していたら、Sはそれを押し付けと捉えて、それ以降ずっと私と会話ができる関係性を拒否し続けることになったかもしれない。しかし、私が彼女の考えを聞こうとしたことによって、彼女は、私との間にある「扉」を向こうから開けてくれたのだ。

私は、若い頃にある先輩の先生から教わったことを思い出していた。「生徒たちとの間には『信頼の扉』があって、そこには鍵がかかっているが、その鍵は向こう側の生徒たちしか持っていないんだよ」

後日談だが、それから1ヶ月ほどして、県知事が開校した分校の視察に来ることになり、私も2年生・社会科の平常の授業を見せることになった。当日、県知事が教室に入って来て、Sの後ろで見学し始めた直後に、Sがつぶやいた。

「知事が来るなんて、授業のジャマだし！」

大きな声ではなかったが、私には聞こえるつぶやきだった。

私は、「なんて素直に自己主張するヤツだ!？」とビックリしたが、咄嗟のことでフォローもできず、しかたなく聞こえないふりをするしかないのであった。

## (16) “ランド”か“シー”か?

県立の児童自立支援施設T学園に併設されたH分校に勤務して2年目、私は持ち上りの3年生担任になった。中2の始めに担任した時には女子生徒1人だけだったクラスも、中3の4月には5人の在籍となり、さらに転入があって、1学期の後半には男子4人女子3人の計7人になっていた。

1学期の途中から、クラス担任の私が秋の修学旅行に向けて企画をすることになった。県内では3年生の秋に修学旅行を実施する中学校はほとんどないと思うが、H分校では、転入してきた生徒が前の学校で修学旅行に参加していない場合でも修学旅行に行けるようにするために、中3の2学期に実施することになっていた。ちなみに、当時の生徒たちの家庭は、そのほとんどが経済的に困難を抱えている状況であったが、そのような場合でも、旅行費用の基本部分は国から補助があり、現地で必要な経費は県からの補助で賄うことができた。

企画を始めて、一般の学校ではあまり経験しない課題に直面することになった。

まず引率者だが、7人の生徒に学校と施設の職員合わせて7人が引率することになった。宿泊先では、1つの部屋に生徒同士だけの宿泊はさせられないため、職員と生徒の部屋割りを考えての対応だった。

次に交通機関だが、新幹線はともかく、都内の移動に際し、生徒と職員合計14人では費用の面から貸し切りバスは利用できない。やむなく、14人でJRと地下鉄を乗り継いで移動することにした。

しかし、現地でその都度乗車券や入場券を手配するのは大変だ。そこで、分校のあるM市内の小さな地元の旅行代理店に旅行全般の手配を依頼するとともに、添乗員さん1人に同行してもらおうことにした。大手旅行業者ではこのような対応はしないと思うし、

そもそも生徒7人の修学旅行は引き受けてもらえないかもしれない。地元の小さな旅行代理店はそれらのことに丁寧に対応してくれた。

ところが、本校の校長から異議があった。「たった7人の生徒のために添乗員はいらないだろう。費用削減のために、職員だけで対応したらどうか」とのことだった。普段から、あまり分校の様子を見に来ることのない校長だったので、数だけで考えたのだろう。しかし、7人の中には小学校1年生ぐらいの学力・生活力の生徒もいて、その子たちの手を引いて、大きな荷物を背負っての移動や見学は、相当な困難が予想される。私は校長に、「一度、生徒たちの様子を見に来てもらって、それから判断をお願いします」と直訴し、その後、なんとか添乗員さんの同行をお願いできることになったのだった。

私が、修学旅行の企画にあたって、特に配慮したいと考えたことが2つあった。

1つは、2泊3日の旅行中の食事7回全部を「バイキング形式」にすることだった。生徒の中には、学園に来る前およそ1ヶ月の間、親から食事を与えられていなかった生徒もいた。その間どうしていたのか尋ねると、最初は家にあった砂糖や小麦粉をなめて過ごし、おなががすいて我慢ができず、おじいちゃんの財布からお金を抜いて買って食べたが、それが見つかって叱られ、その後万引きを繰り返して学園に来ることになったという。幼い頃から衣食住が満足な状況になかった生徒たちも多い中、修学旅行中だけでも好きなものを好きなだけ食べることができる体験をさせてやりたいと考えたのだった。

もう1つ、見学・訪問場所については、できるだけ自分たちの希望や意見を出し合いながら、7人全員の納得でそれを決めさせるということだった。聞いてみると、7人全員が東京には行ったことがなく、新幹線に乗るのも初めてだという。生徒たちだけの行動は認められないため、一般の学校で実施している「自主研修」はできないが、その代わりに見学先の希望を出し合い、可能な限りそれをコースに入れられるようにした。また、事前にインターネットで見学先の情報を調べることも行った。

その取り組みの中で、ある時ディズニーランドのことが話題になった。

「先生、ディズニーランドってあるんだよね。そこには修学旅行の時に行くんですか?」

「行ってもいいけど、別にムリして行かなくてもいいよ。みんなは東京方面に行ったことがないみたいだから、ディズニーにも行ったことないんだよね。“ランド”だけでなく“シー”もあるんだよ」

「えーっ!? どう違うんですか?」

「テーマやアトラクションが違うから、ネットで調べてみるといいよ」

しばらくして、ディズニーランドをコースに入れるかどうか、話し合うことになった。

「ディズニーはどうするの?」

みんな、口々に「行きたいです!」と言う。

「じゃあ、“ランド”と“シー”はどちらがいいのかな?」と聞くと、





「先生、私たち女子3人は相談して“ランド”がいいということになったんだけど、男子は4人とも“シー”がいいって譲らないんです。」

「男女で意見が分かれたんだ。単純に多数決すると男子の意見で決まってしまうそうだね」

「えーっ、いやだ！」

話し合いの時間が終わっても、どちらがいいかは平行線になり、結論が出なかった。

私は、昼休みに男子4人を別教室に呼んで、“シー”にこだわる理由を尋ねることにした。「君たちはどうして“シー”がいいのかな？もしかして、“シー”ではアルコールが飲めるってことが理由ではないよね」

「先生、僕たちはそんな悪いことは考えていませんよ。本当です」

「そう？じゃあ何で“ランド”は嫌なの？」

4人は顔を見合わせ、しばしの沈黙があったが、男子のリーダー格のKが口を開いた。「理由を聞いても、絶対に女子には秘密にすると約束してくれますか？」

「いいよ、約束しよう」

「じゃあ、話しますが・・・、“ランド”には『なんとかマウンテン』というアトラクションがいくつもありますよね。それってジェットコースターみたいだけど、僕たち、今までジェットコースターにも乗ったことないんです。もし、乗ってみて怖くて叫んだりした時、女子に見られたら恥ずかしいじゃないですか・・・」

真面目な顔で、他の3人もうなずく。

私は、なんとか笑いをこらえながら彼らをなだめようとした。

「そうか、そういう理由で“ランド”に反対していたんだね。でも、大丈夫だよ。マウンテンは普通のジェットコースターほど怖くないし、心配だったら乗らなくてもいいんだよ。乗りたいアトラクションごとに2～3人でグループを作って先生と一緒に乗ればいいんだよ。“ランド”にも怖くないアトラクションはいっぱいあるから、調べてみるといいよ」

「そうですか。よかったあ！じゃあ、そういうことでいいんなら、“ランド”でもいいです。今の話は、女子には内緒にしてくださいね」

「うん。約束するから安心していいよ」

その日の帰りの会で、男子から“ランド”に行ってもいいとの話が出て、“ランド vs シー”の論争にようやく決着がついたのだった。女子は、「どうして“ランド”に行く気になったの？」と怪訝そうだったが、男子4人は「俺たちが譲ってやるからさ」という風に、少し威張っている。

私は、それを見ながら、ようやく笑いをこらえたのだった。

## (17) 1人の進路選択を救った法制度

児童自立支援施設・T学園に併設されたH分校での2年目も後半を迎え、中学3年生の担任だった私は、生徒たちの進路決定の問題に向き合うことになった。一般の学校で

の進路指導も様々な難しさはあるが、クラスに在籍していた生徒が7人とはいえ、一人ひとりの抱える家庭状況や本人の自立に向けての見通しなどの問題もあり、一層の進路選択の困難さに直面することとなった。

進路選択にあたっては、本人の希望も踏まえつつ、家庭状況や受験への適応性の問題などにも配慮し、できるだけ多様な選択肢を検討しながら、一緒に考えていくことにした。ただ、一般の学校と大きく違ったのが、保護者との直接の面談はできず、進路の相談は施設の県の職員を通して行うという形だったことだ。そのため、施設職員と分校職員で共通理解を深めながら、一人ひとりにできるだけ最善の進路が見つかるように、何度も検討の機会を持った。

2学期には、本人との面談や施設職員を通じた保護者との意向確認を重ね、結果的に、7人のうち、年度途中からの転入の1人も含めて支援学校への進学が2人、障がい者支援施設への入所が1人で、4人が普通高校への進学を希望することになった。4人のうち、3人は県立高校を受験することになったが、学級委員長をしていたMという女子生徒が、私立の高校を検討することになった。

Mは、母親はいるものの、その養育能力がほとんどなく、生まれてから乳児院～養護施設～里親～養護施設と経験して、前の施設で生活上の課題があったことからT学園に入所した生徒だった。入所してからの生活や学習の努力は目に見えるものがあり、中3の秋には前に在籍していた中学校に戻ることができるようになっていた。しかし、家庭での母親のM本人と妹に対する接し方の問題（虐待やネグレクト）もあり、その後、再度学園で寮生活をしながらもとの中学校に通学をするという形をとることになった。

Mの進学先をめぐっては、本人の第1希望はM市内の私立S高校だったが、実は当時の支援制度では養護施設から私立高校に進学することは費用的に困難だと言われていた。しかし、偶然にもその年に国会で「高校授業料無償化法案」が成立して、約1万円の授業料補助が実現したのだった。

私と施設の担当職員とでMの希望する高校を訪問して、入学した場合に実際にかかる諸費用を見積り、支援制度で充当できる費用を確認した。その結果、「授業料無償化」によって奇跡的に「養護施設から私立高校に通う形」が可能になったのだった。私は、法制度が一人の子どもの進学を保障するということを実例で認識することになったのだった。

こうして1月のある日、Mは第1希望のS高校を一般受験した。落ち着いて入学試験と面接に臨めば、十分に合格できると思っていた。ところが、そう簡単にはいかなかった。試験の翌日に、S高校の校長から私宛に電話がかかってきた。

「Mはもう前の中学校の所属になっていますが、私に何の御用ですか？」

「実は、昨日の面接の途中でMさんが泣き出してしまって、面接にならなかったんです。可否



を検討する職員会議でも、意見が分かれてしまって。そこで、学園生活は実際どんな様子だったのか、直接聞いてみようと思って電話をしました」

「泣き出した時に、どんな質問をされたのですか？」

「『中学校3年生でどんな活動をしましたか？』という質問だったようです」

私は、Mが泣き出した理由がわかるような気がした。彼女が、学園から前に在籍していた中学校に戻ったのは11月だったが、その頃には、運動会や文化祭などの行事も、部活動や大会への参加も、生徒会活動の取り組みも、3年生にとってはほぼ終わっている時期だった。だから、自分がその学校で活動したと言えるものはないし、ましてやT学園にいたことを言うわけにはいかないと思い、どうしたらいいかわからなくなり、パニックになったのではないだろうか。

私は、そのことをS高校の校長に伝えるとともに、その上で、彼女がクラス委員として様々な取り組みの先頭に立ってくれたこと、学園では自分の生活を見つめ、自分の課題の克服や学習の向上に真摯に向き合ったことなどを話した。そして、「あとは、T学園にいたことは先入観を持たないでいただき、現在の彼女に対してご判断をお願いします」と話した。

その後、合格発表の2日前ほどに、S高校の校長から再度電話があり、Mの合格を直接連絡してもらったのだった。私は、涙をこらえて副校長にそのことを報告した。

Mは、中学校の卒業と同時に学園の寮も退所して、市内の養護施設に入所し、そこから自転車で30分ぐらいかかるS高校に通うことになった。私は、意を決して彼女に話すことにした。

「S高校を受験して、合格して入学するまでには、もちろん自分自身の努力もあったと思うけど、まわりの多くの人たちの支えがあったことも忘れないようにするんだよ。そして、3年間、絶対に高校をやめるんじゃないぞ。学校に勤めて今まで、こんなことは言ったことがないけど、もう親はあてにも頼りにもするな。これからは自分の力で3年間頑張らなくて、卒業したら高校卒業の資格を持って就職できるから、自分の力で幸せになるしかないぞ」

彼女は黙ってうなずくだけだった。

最後のハードルになったのは入学金だったが、S高校側で半分に減免してくれ、残りの半分は社会福祉協議会で貸してくれることになり、入学の準備は整ったのだった。

その後、Mは無遅刻・無欠席で高校を卒業して、東京のスーパーマーケットの会社に就職することができた。その時には、私と、担当の職員と、学園の養護教諭で、ささやかな送別昼食会をして送り出した。

実は最近、25歳になったMから連絡があり、久しぶりに再会する機会があった。就職して何年かして、最初のスーパーマーケットは退職したとのこと。あまり深くは聞かなかったが、どうやら今でも、時々感情の起伏が自分でも抑えられなくなることがあるらしく、そのことも関係した様子だった。幼児期の母親からの虐待やネグレクトがその原因となっていることについて、自分でも自覚しているようだった。今はどうしているのかと尋ねると、アルバイトをしながら次の仕事を探しているとのこと。あと何年かのうちには、自分の感情をコントロールできるようになって、それが克服できたら、家庭を持ちたいとも話していた。

私は、話を聞きながら、心の中でエールを贈ることしかできないのだった。

## (18) 「先生、今度『犬の歌』を作ってください」

県立児童自立支援施設T学園に併設されたH分校の勤務も3年となり、4年目も留任希望を出したのだが、希望はかなわず、2013年4月にM市内のM中学校に異動して1年生を担当することになった。その後、その学年を持ち上がり2年生担当となった。

1学期後半のある日、1組の担任が休んだので代わりに昼食の時間に行くことになった。弁当を持って教室に行くと、1班に休んだ生徒の空席があったのでそこに座らせてもらうことにした。少しして視線に気が付いた。向かいに座っていたAという女子生徒がずっとこちらを見ていたのだ。

「どうしたの？ ご飯粒でもついてるかな？」

すると、返って来たのは意外な言葉だった。

「先生、犬に似てますね」

「えっ？ まあ、戌年生まれだけど、犬に似てるとは言われたことないなあ・・・」

そこでしばらく間があって、次に出た彼女の言葉はもっと意外なものだった。

「先生、今度『犬の歌』作ってください」

「・・・？」

実はAは、2011年3月の東日本大震災による津波で被災し、母親を亡くしており、当時暮らしていた沿岸の町からM市内の祖父の家（父親の実家）に避難してきていた生徒だった。私は、どうして犬の歌を作ってほしいと言ったのか聞こうとしたが、何か、被災で傷ついた彼女の心の奥に触れるような気がして、聞くのを思いとどまった。

私は、担当していたこの学年で、行事が成功した時の学年集会や1年生の最後の授業の時などに、お祝いやお礼代わりにギターを弾いて歌を歌ったりしていたので、そのこともあって犬の歌を作ってほしいと言ったのだろうとは考えたが、「犬」が震災・津波による被災や母親を亡くしたこととどのような関係があるかを詮索してよいものかどうか考え込んでしまった。しかし一方で、彼女の要望を断るわけにはいかないと考えた。どんな理由かはわからなくても、私なりに、彼女の願いに精一杯応える努力はしてみようと思ったのだった。

「一応、『犬の歌』を作ってみようとは思いますが、ちょっと時間をもらえるかな。満足してもらえるような歌になるかは保障できないけど、努力はしてみるから」

「わかりました」

そうして歌作りに取り掛かったが、私は、できるだけ明るい感じの歌にしようと考えた。そして、「学区を犬と散歩しながら、『犬と人間は、人間の言葉を通じた会話はできないけれど、いつか、犬の気持ちがわかっ



「たらいいなあ』とっている」という設定で歌詞を書くことにした。同時に、犬と人間の交流をテーマにしなが、友だちとの関係についても同様なことを考えてみることでできればいいと考えた。「人間も、実はまわりの人たちの気持ちがよくわかっていないかもしれない。人は、誰でも心の中にいろいろなものを抱えているが、表面にはなかなか表れないものも多い。友だちの気持ちの中の大切なものもいつか教えてほしい・・・」というような想いを込めた。

そして、次のような歌が完成した。

「素敵な君の笑顔には 優しくて 少しでも垂れた小さな目 輝くよ  
言葉はなくても わかるんだ 散歩に出かけよう  
夕陽に染まる シルエット 博物館の道  
吹き渡る 風の中に 君の声が響く (bow wow !)  
いつかは君の 心の中 話してほしい  
いろんな事が きっと つままっているのかな 」(\*以下略)

A にはできた歌を CD に入れて渡したが、その後、どのような感想をもったかは詳しく聞けないでしまった。ただこの歌は、私にとってもとても大切な歌になった。そして、今でもよくリクエストをもらう歌でもある。

東日本大震災・津波による被害を受けた方々は、特に岩手、宮城、福島に多く、大人だけでなく子どもたちにも深刻な傷跡を残した。直接の被害を受けなかった私は、おそらくその子たちの気持ちを正確に理解することはできないのだろう。しかし、その気持ちを可能な限り思い遣り、寄り添おうとすることは大切ではないだろうか。A がどんな気持ちや理由で「犬の歌をつくってほしい」と言ったのかはわからないが、少なくとも、私はその言葉を無視したくはなかったのである。

## (19) 18 歳選挙権がやってくる

初任の頃に「学校の仕事でこのようにしてみたい」と考えていたことのうち、実現できたこともあるが、当然実現できなかったこともたくさんある。その中の一つが、「自分の担当する社会科の授業を通して今の社会の現状を捉えながら、みんなで考え合い、適切な思考や判断ができるように学び合う授業づくりがしたい」というものだった。

社会科の目標の一つに、「社会事象を的確に捉える能力を育てること」や「社会事象に対して適切な思考力や判断力を持つことができるよう育てること」があると考えるが、なかなかそれが実現できないうでしまった。それは、教員としての自分自身が、いわゆる『「受験のための知識学力」の呪縛』から抜け出せないできたということもあからかかもしれない。

理想としては、授業において「みんなで考え合うこと」や「一人ひとりが自分なりの意見を持つこと」を大切にしたいと願いながら、現実には教科書に書いてある重要語句などを確かめさせることを授業の中心としてしまっていたし、またそのことによって、

それが得意な生徒が授業参加の中心になってしまう状況を作り出してしまっていた。みんなで考え合ったり、みんなが意見を言い合ったりするためには、それにふさわしい授業の追及課題を提示したり、その追及のための授業過程を組んだりしなければならないのだが、それができなかったということであり、まったくの力量不足である。

最近の社会情勢を見ると、以前より一層、今まで「これは不変だろう」とか「この判断は揺るがないだろう」というふうと考えられてきたものが、「そうではなくなってきた」という状況が見られる。「平和」「人権」「環境」「資源・エネルギー・食料」「共生」などといった世界的・地球的課題に対する解決の見通しは、ますます不透明になっているし、国内でも解決すべき課題は山積する一方である。このような状況の中で、社会事象を通して考え合い、主体的な意見を持つということの重要性は、ますます増していると思う。

2015 年 6 月、70 年ぶりに選挙の有権者資格が改正されたことをきっかけに、授業でこのことを取り上げながら、「みんなで考え合う」ことに少しでも近づいてみたいと考えて、3 年生の公民の授業で取り組んでみることにした。

民主政治の実現や選挙権の獲得のために、人類がどれだけの苦勞と犠牲や代償を払ってきたかについては論を待たない。しかし、一定の民主政治が実現した後に、選挙における投票率は次第に低下の道をたどってきた。一方で、東日本大震災とそれに関連した復興や原子力政策の問題、平和と安全の問題とそれに関連した集団的自衛権の問題、経済の状況とそれに関連した労働問題や貧困・格差の問題・・・など、これから生徒たちが生きる 21 世紀中盤から後半にかけて、考え、方向性を持つべき重要な課題が提起されている。同時に、『民主主義そのものの在り方』も問われる事態となっている。

こうした状況下では、教科書に書いてある、あるいは教科書で探せば見つけられる答えだけでは、これらの問題を適切に捉え、理解することは到底できない。また、学びがその範囲だけで留るならば、国民全体のためにどのような政策が取られるべきなのか、世界全体の人々が幸福になるためにはどのような道すじが必要なのかといったことを考え合い、一人ひとりが意見を持ってそれを交流しながら、正しく意思決定していくことは不可能であろう。従って、様々な意見を出し合う中でそれらと比較検討し、正しい民主主義のルールの中で全体の合意形成をはかっていくために、学校でもその方向を志向する授業の取り組みが必要となると考えられるのである。

\*事前アンケート結果から (3 年生 97 人中 92 人の集約)

①「18 歳選挙権」に賛成? 反対?

●賛成・・・60.9% ●反対・・・38.0% ●その他・・・1.1%

●賛成の主な理由

- ・できるだけ多くの人の意見が必要だし、その中でも若い人たちの意見が重要になると思う。
- ・他の国でも 18 歳から多いし、18 歳はもう大人だと思うから。
- ・政治や選挙に対する関心が高まると思うから。
- ・18 歳以上に選挙権を与えるということは大人として扱うということなので、これを機会に他の大人の扱いについても検討をすることになると思うから。

●反対の主な理由

- ・20歳から投票できたのに20代の投票率が低く、18歳になっても政治に興味・関心をもつとは思えないから。
- ・18歳はまだ政治をよくわかっている人が少なく、しっかりと判断ができないと思うから。
- ・政治や選挙のことをよく知らずに、大きな政党に適当に投票する人がいると思うから。

### ②「選挙で投票できる人が18歳以上」になったらどうしますか？

- 毎回必ず投票する・・・29.3%
- 投票に行ける時には投票する・・・46.7%
- あまり投票には行かない・・・19.6%
- その他・・・4.3%

#### ●主な理由

- ・18歳以上と決まったのなら責任を持って投票すべきだと思うから。学校行事や部活などがあっても、期日前に投票すればよいと思う。
- ・親が毎回投票しているから、自分も一緒に行って投票すると思う。
- ・政治に対する意見がたくさんあるから投票に行く。意見を反映させるチャンスでもある。
- ・自分の意見を大切にしたいし、1票でもそれが集まれば政治を変えることができると思う。
- ・過去に（選挙権を得るために）闘った人たちがいるから。
- ・まだ政治のことなどがよくわからないから、あまり行かないと思う。
- ・何をどうすれば、どうなるのか、よくわからない。
- ・少数派の意見は聞いてくれないから、あまり行かないと思う。
- ・「この人をお願いしよう」という人がいなくて納得がいけない時が多い。

### ③自分が投票する場合に大切にしたいことは？

#### ●主な意見

- ・立候補者やその政策についてよく知るために、ニュースを見たり新聞を読んだりしたい。適当に選ぶのだけは避けたい。
- ・国民の人たちのために、住みやすい社会を作るとい活動してくれる人に投票したい。
- ・どんなことがあっても、戦争を起こさない人に投票する。
- ・まわりに流されずに、しっかりと自分の考えを持って投票したい。
- ・どの政党が何をめざしているかをしっかりと理解し、自分の考えに合う政党に投票したい。
- ・政治家にとって良い事ではなく、国民にとって良い事をしようとしているかを見て投票する。



- ・選挙で公約したことを実現するにあたって、自分はこうしていく、みんなにはこうしてほしいなど、きちんと明確に言える人を選びたい。
- ・日本の現在の良くないところも明確にし、なおかつ、投票によってこれからどう変えていけるかということも考えながら投票したい。
- ・まじめに働いている人たちが、安定した暮らしができる政治をしてくれる人を選びたい。
- ・今のことも大切だけど、未来のことや次の世代のこともよく考えて選びたい。

この事前アンケートを受けて、始めは学習課題を「18歳選挙権について、賛成か反対か、意見を出し合おう」として、自由に意見を出し合う展開にしようとも考えた。しかし、それだけでは選挙権の年齢という方法論についての賛否が中心となってしまい、参政権についての認識を深めていくことや政治に対する意見表明の大切さにつなげることが難しいと考えた。大切なのは、「社会情勢に関心を持ちながら、それらを的確に判断し、同時にそれらに対して自分なりの意見を主体的に持つことができる」ということである。そこで、そのような考え方に少しでもつなげるために、学習課題を『18歳で投票できるようになったら、政治に対して言ってみたくていうことを出し合ってみよう』とし、参政権の重要性への入口にしたいと考えた。（\*授業過程は略）

#### ●生徒たちが政治に対して言いたい主な意見

（\*授業中の発言及び授業シートに記載された意見から）

- ・選挙でやるといった公約をきちんと実行してほしい。
- ・政治について、国民にわかりやすいようにしてほしい。
- ・法律を改正したり、新たに作ったりする時は、国民の意見をちゃんと聞いてほしい。
- ・もっと国民の生活のことを考えて、国民全体のために良い政治をしてほしい。
- ・外国との交流をもっと大事にしてほしい。
- ・国会議員は国民の代表として選ばれているのだから、もっと国民の声に耳を傾けてほしい。
- ・今の日本に何が大切か、何をすべきか、ちゃんと考えてほしい。
- ・目先のことだけでなく、長い見通しを持って政治をしてほしい。
- ・憲法改正ではなく、もっと身近なところに政治が取り組む問題があると思う。
- ・戦争はしないでほしい。
- ・オリンピックに多額の費用をかけるよりも、被災地の人たちが安心できる生活の場所をつくるために復興にきちんとお金をかけてほしい。
- ・税金をムダ遣いしないでほしい。
- ・日本の国の借金が多いと聞いたことがあるので、大丈夫なのか。
- ・国の借金問題を解決するために、税金を上げるのはよくない。まず、景気を回復させるために税金を下げるべきだと思う。
- ・政治家はあまり信用されていないので、信用されるようなことをしてほしい。
- ・政治家が信頼されるような政治をしていけば、投票率は上がってくると思う。
- ・国会でヤジを言ったりせずに、国の政治をどうするかという議論をちゃんとしてほしい。
- ・会議中に寝ないでほしい。

## ●授業後の主な感想（\*授業シートに記載された感想から）

- ・みんなが選挙権についてどう考えているのかわかったし、自分の中でも選挙について考えることができてよかった。
- ・自分の意見と違う意見を聞いてなるほどと思った。もっと他の人の意見を聞きたかった。
- ・賛成、反対についていろいろな意見を聞くことができてよかった。選挙は必ず行きたい。
- ・私は選挙権を18歳にすることに賛成だったが、反対の人たちもけっこう多かったし、その理由もなるほどと思うことが多かった。
- ・17、18歳の政治・選挙への関心がわかったし、今回の改正で、政治に参加できる人が増えるという点ではいいと思った。
- ・いろいろな人の意見を聞いて、わかることが多かった。国の借金のことや消費税のことなどが言われているけど、結局は責任を持っていないと思う。国を変えるなら、政治家自身も変わる必要があると思った。
- ・私はニュースをよく見る。日本は「平和な国」だと見られるかもしれないが、今の政治は問題ばかりだと思う。国会議員は自分の意見をはっきり言わずに、党の代表にまかせっきりだと思う。政治家の人たちは、国の将来をかけたことを話し合っている、国の代表だということを忘れないでほしい。
- ・あまり政治に関心がなかったが、今回の授業をやってみて少しだけ興味がわいた。もう少しで僕たちにも選挙権がくるので、絶対に戦争しないという考えの人に投票したい。
- ・政治にまったく興味がなかったが、知ってて損をすることではないので、時間がある時はニュースを見るなどして学んでいくことができればいいと思った。
- ・政治に興味がなくなるとか、わからないとか・・・ということではいけないと思う。20歳でも18歳でも、選挙権があるのにわかろうとしないということは問題だと思う。興味がなくなっているうちに世の中が変えられても、文句は言えないと思う。
- ・投票は、やはり行くべきだと思った。Tさんが言っていた通り、行かないで決まったことに文句は言えないので、よりよい日本になるためには、行かなければいけないと思った。
- ・今の選挙の投票率が低いことに驚いた。政治家がもっと国のためになることをすればいい。
- ・18歳選挙権については、いいこともあれば、よくわからないまま投票してもいいのか、という問題点もあるんだと思う。だから、政治のこともよく考えながら、よく理解して選挙に行きたいと思った。
- ・授業でたくさんの人の意見を聞いて、政治に対していろんな不満があるのに投票に行かないのはおかしいと思ったので、不満があるからこそ投票に行こうと思った。今の政治には、いろいろな世代の人たちの意見が必要だと思ったので、18歳になったら投票に行こうと思う。
- ・18歳の選挙権については、正直に言って賛成でも反対でもなかったけれど、そのように決まったのであれば、やっぱり投票するのが権利だと思うので、もっと政治のことを知って積極的に参加したいと思う。でも、それには責任も伴うと思うので、たかが1票だけどされど1票と思って投票したいと思う。

- ・授業の最後のところで考えた「政治に対して言いたいこと」について、私は、私たちの身近なことについてもしっかり話し合ってほしいと思った。あと、困っている人たちのこともちゃんと考えてほしいと思った。
- ・やはり、18歳選挙権には反対です。それをやるためには、他の法律も見直さなければいけないと思うから。
- ・選挙制度のために闘ってきた人たちがいるということも考えるべきだと思った。
- ・授業では、自分の意見とみんなの意見を照らし合わせて、選挙のことや政治のことを学ぶことができた。こういう機会はありませんでしたので、また、やってみたい。
- ・最近、ニュースなどで政治について多く取り上げられているので、少し興味がある。大人だけがつくる国ではなく、未来をつくる私たちの声も聞いてほしいと思った。

「みんなで考え合うこと」や「一人ひとりの生徒が自分なりの意見を持つこと」を中心とした授業をやりたいたいと思いつつも、なかなか実践の機会がつかれないまま時間を過ごしてきてしまった。「70年ぶりの選挙権の変更」という機会をきっかけに、試行錯誤ながらも思い切って実践を試みようと考えた。

決して十分な準備と見通しがあったわけではないし、もう少し自分に力があれば、もっとよい展開が可能だったとも思う。しかし、生徒たちの感想からは、授業のねらいに近づいてくれたものが多く寄せられた。このことから、やはりこのような志向をもっと日常から粘り強く積み重ねることの必要性があるのだと思う。

最近の政治状況を見ていると、民主主義や立憲主義の存立自体が問われていると痛切に感じる。しかし、この状況が生じていることを契機に、政治に対する国民の向き合い方が、大きく変わるのではないかと期待も感じられる。政治に対する「ある種の主体性・自発性」のようなものが、世代を超えて表出しているのを見てきているからだ。

その時に、主権者としての国民一人ひとりが、主体的な判断に基づいて民主政治の実現に参画していくという本来の国民主権の意義が問われてくるだろう。そしてそれに関連して、主権者としてどのような思考や判断の力が必要なのかということも重要になる。このことに対する学校の役割は大きい。今一度、教育や学校が何のために存在するかの再確認のもとに、あるべき理想を考え合い、議論しながら、実践の取り組みを進めていく必要があると思うのである。



# あとがきに代えて

35年ほど学校教育の現場で仕事をする中で、先輩教職員や保護者のみなさん、そして地域の方々から多くのことを教わってきました。しかし、実に様々で多くのことを教えてくれたのは生徒たちでした。もともといわゆる「指導力」というものに自信がなかったということもありますが、生徒たちとの活動を通して、価値観を一方的に押し付けるのではなく、ともに考え合いながらあるべき道すじを見つけ出していこうと考えるようになっていきました。様々な問題や課題に対する答えは1つではないのだとも思います。

学校の仕事はいつも簡単ではなく困難なことばかりでしたが、1年に1回か2回でも、生徒たちとともにその成果を喜び合える出来事があると、それだけで「また頑張ろう」という気持ちになれました。志が折れそうになった時には、初任校でお世話になったM先生から教わった、フランスの詩人、ルイ・アラゴンの「教えるとは ともに希望を語る こと 学ぶとは 誠実（真実）を胸に刻むこと」という言葉に励まされました。

生徒たちが教えてくれたことは、ここに書き切れないほど多くのことがあるのですが、紙面の都合で、勤務した学校ごとにいくつかのエピソードを選ぶことにしました。話の大筋は作ったり変えたりしていないつもりですが、会話の詳細までは一字一句正確に記憶している自信がないのでご容赦いただくとともに、大意を汲み取っていただけると有難いです。

最近の世の中は、対話の重要性が軽視されているような気がしてなりません。それは、学校教育の現場でも少し心配される状況があるような気がしているのですが、考えすぎでしょうか。子どもたちに一方的に価値観を押し付けたり、納得のいかないルールを強要したり、大人が「正義」を勝手に決めてしまっていることはないでしょうか。「同時代に生きる子どもたちと対等の立場で、対話による説得と納得を通じて合意をつくりだす」という営みを大切にしたいと思います。そうでないと、子どもたちが次の時代を創ってゆく主体として成長できないのではないかとも思っています。

ここに記したことは、もしかしたら独りよがりの取るに足らないことかもしれませんが、拙い文章から、生徒たちが教えてくれた様々なことを少しでも読み取っていただければ幸いです。

2023年8月11日  
佐藤 淳一

※本冊子の内容は、2020年～2022年に岩手教育総合研究所から発行された「ニュースレター」に掲載されたものをもとに、訂正・修正を加えるとともに、新たにいくつかの項目を書き起こしました。

## ●いわて教育総研ブックレット

『教室の窓から ～生徒たちが教えてくれたこと～』

発行日：2023年10月20日

編集・発行：岩手教育総合研究所

製作・印刷：川口印刷工業株式会社

\*カット：佐藤梨子

\*無断転載・複製を禁じます。